

一報 告 書一

開催日:2023年 1月22日(日)

会 場: 渋谷教育学園渋谷中学高等学校

Web 配信 (Zoom ウェビナー)

主 催:文部科学省/日本ユネスコ国内委員会

共催:NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム/渋谷教育学園渋谷中学高等学校

後援:外務省/環境省

協力:公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

協賛:カシオ計算機株式会社/花王株式会社/株式会社 ファーストリテイリング/東京メータ株式会社

目 次

◆総括3
◆実施概要 ·······5
◆告知6
◆大会日程7
◆開会挨拶8
◆ユネスコスクールとしての取組事例を生徒が紹介9
◆文部科学省からの施策説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
◆パネルディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
SDGsを目指した学校教育・学習活動を探る~ユネスコスクールレビューより
◆ランチョンセミナー(企業・団体による情報提供) ······34
◆ポスター発表36
◆研究協議会43
◆閉会式·ESD 大賞表彰式·······46
▲マンケート紅田

総括

持続可能な社会の創り手を育む ESD の推進を目指す、第14回ユネスコスクール全国大会/ESD 研究大会(主催:文部科学省、日本ユネスコ国内委員会)は、令和5年1月22日、東京都渋谷区の渋谷教育学園渋谷中学高等学校とオンラインのハイブリッド形式で開かれた。パネルディスカッションでは先進的に取り組む4校が特色ある活動を紹介するとともに、成果や課題を共有した。

今回はオンラインだけでなく、3年ぶりに対面でも開催した。全国から ESD に関心を持つ教員に加え、教育委員会 や教育団体の関係者などが参加した。

開会式で登壇した永岡 桂子文部科学大臣は、気候変動や経済格差に加え、新型コロナウイルス感染症やロシアによるウクライナ侵略など、様々な世界課題に直面する中で、「課題を自分事として捉え、自分にできることを考え、行動する力を身に付けることは地球規模の課題の解決にもつながる」と ESD の意義を強調した上で、「我が国の ESD に関する豊かな教育実践の蓄積が今後一層共有され、ユネスコスクールの強みであるネットワークで支え合いながら、連携・協働が推進されることを期待している」と挨拶した。高際伊都子校長は、コロナ禍が学校にもたらした変革の中には、ポジティブな面も多く含まれていると説明し、「日本の中高生が社会や世界に発信する機会が増え、若者が今の課題を自分事と捉え、解決に向けて真剣に取り組んでいるということを私たち大人は知ることができた。本日の大会でも SDGs の考え方が社会に根付く一助になることを祈念している」と挨拶した。

次いで会場校の渋谷教育学園渋谷中学高等学校の生徒たちが自分たちの実践について発表、意欲的に ESD に取り組んでいる姿を示した。

大会の目玉でもあるパネルディスカッションでは、「SDGsを目指した学校教育・学習活動を探る」をテーマに、▽東京都多摩市立東寺方小学校▽奈良教育大学附属中学校▽中部大学第一高等学校▽広島県立広島国泰寺高等学校の4校が事例紹介に加え、授業における成果や課題を説明した。

東京都多摩市立東寺方小学校では、学校近くにある森を活用して「森を守る」と「森を生かす」という2つのグループに分け、授業を展開していることを発表した。奈良教育大学附属中学校では、昨年度から ESD を授業だけでなく、「ユネスコクラブ」として部活動でも展開している実践について報告した。中部大学第一高等学校は、今年度設置した様々な教科の教員からなる ESD 推進部や ESD の推進支援、教育開発などの取組について発表した。平和記念公園に最も近いという土地柄を生かし、平和をテーマに3年間、探究授業を行っている広島県立広島国泰寺高等学校は、成果として、SDGsの望ましい姿と現状にある課題の意識付けができたと報告した。

昼のランチョンセミナーを挟んで、午後はポスター発表からスタートし、

会場発表とオンライン発表の2つの方式で行った。それぞれの発表校は次の通り。

○会場発表=▽東京都杉並区立西田小学校▽千葉県八千代市立大和田南小学校▽晃華学園中学校高等学校/東京立正中学校·高等学校/麗澤中学·高等学校/公益財団法人五井平和財団▽宮城県仙台第三高等学校▽飯塚高等学校

○オンライン発表=▽福島県会津若松市立川南小学校▽東京都板橋区立西台中学校▽岐阜県立八百津高等学校 ▽岩倉高等学校▽福岡県公立古賀竟成館高等学校▽湘南学園小学校 実践を深める研究協議会は3つのテーマで開かれ、それぞれ次の学校、教育委員会等が発表し、熱心に研究協議を行った。

- (1)「平和・国際理解をめざす」=▽大阪・関西ユネスコスクールネットワーク(ASPnet)▽宮崎学園中学校・高等学校(2)「学び方を学びながら目指す知(協働・探究活動)」=▽福島県只見町教育委員会▽埼玉県久喜市立久喜小学校
- (3)「誰一人取り残さない学び(社会的課題の解決)」=▽神奈川県横浜市立東高等学校▽兵庫県立川西明峰高等学校

閉会式に続いて、ESD の取組を顕彰する「ESD 大賞」の発表が行われ、文部科学大臣賞は東京家政学院 中学校・高等学校が受賞した。そのほか、ユネスコスクール最優秀賞や小中高校賞、ベスト・アクティビティ賞などに7校が選ばれた。

これらの学校では、豊富な体験活動が行われており、机上の学習が実社会で役立てられる学習になっていることなどが評価された。東京家政学院中学校・高等学校の佐野金吾校長は「ESDの評価は生徒に表れる。どのように価値観を変えたのか、学びを変えたのか。持続社会の創り手となるよう、今後も進めていきたい」と喜びを語った。

実施概要

■日 時: 令和5年1月22日(日)9時30分~17時 ※受付9時~

■主 催: 文部科学省/日本ユネスコ国内委員会

■共 催: NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム/学校法人渋谷教育学園

■後 援: 外務省/環境省

■協力:公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

■協 賛: カシオ計算機株式会社、花王株式会社、株式会社 ファーストリテイリング、 東京メータ株式会社

■会 場: 渋谷教育学園渋谷中学高等学校(〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1-21-18) Web 配信(Zoom ウェビナー)

■テーマ:「子どもの未来、教師の未来、学校の未来—SDGs を目指した学校教育・学習活動を探る」

■大会概要:

学校教育においても大きなテーマとなっている SDGs。持続可能な社会の創り手の育成に、学校は、ユネスコスクールはどのように貢献するのか。また、家庭、地域などといかに連携するのか。

今年度から実施されているユネスコスクール定期レビュー、今大会に先駆けて実施されている地方ブロック 大会の成果、教育現場の具体的な取組などをもとに展望します。

■参加者: 会場270名・配信358名 計628名(2023.2.14 時点。アーカイブ配信の視聴者を含む。)

告知

■チラシ





(表) (裏)

大会日程

時間	プログラム	会場
9:00	受付	
9:30~9:40	開会式 (表現) 永岡 桂子(文部科学大臣) 高際 伊都子(渋谷教育学園渋谷中学高等学校校長)	
9:40~10:00	ユネスコスクールとしての取組事例の紹介 発表 渋谷教育学園渋谷中学高等学校生徒	
10:00~10:20	文部科学省による施策説明白井俊(文部科学省国際統括官付国際戦略企画官)	
10:30~12:00	パネルディスカッション SDGsを目指した学校教育・学習活動を探る~ユネスコスクールレビューより 司会進行 望月 浩明(かながわユネスコスクールネットワーク事務局長) 発表 下山 桃子(東京都多摩市立東寺方小学校教諭) 有馬 一彦(奈良教育大学附属中学校教諭) 村上 哲也(中部大学第一高等学校教諭) 上元 真弓(広島県立広島国泰寺高等学校教諭) 第部 永田 佳之(聖心女子大学教授)/石丸 哲史(福岡教育大学教授)	体育館
12:10~13:10	ランチョンセミナー【企業団体からの情報提供】 「"届けよう、服のチカラ"プロジェクト」 山口 由希子(㈱ファーストリティリング サステナビリティ部ビジネス・社会課題解決連動チーム) 「乾燥性敏感肌のスキンケアメソッド」(VTR発表) 久保 久子(花王㈱化粧品事業部門キュレルグループ) 「いのちの授業」(VTR発表) 若尾 久 (NPO法人いのちの教室理事長)	
13:10~13:30	休憩	
13:30~14:45	ポスター発表 ユネスコスクールとしてのESDの取組内容 および成果を共有します。 発表 次ページ参照 同会進行 住田 昌治 (湘南学園学園長) 棚橋 乾 (全国小中学校環境教育研究会顧問)	金襴発表 体育館 オンライン発表 地下会議室
	研究協議会 (i) ~ (iii) (i) 平和・国際理解をめざす (i) 平和・国際理解をめざす (ii) 明田 一彦 (創価大学教授) (発表) 治部 浩三 (大阪・関西ユネスコスクール ネットワーク(ASPnet) 事務局長) 伊東 望 (宮崎学園中学校・高等学校教諭)	地下会議室
15:00~16:30	(ii) 学び方を学びながら目指す知〈協働・探究活動〉 同会 伊井 直比呂(大阪公立大学教授) 発表 仲丸 和宏(福島県只見町教育委員会生涯学習係係長(兼) 社会教育主事(兼)指導主事) 太田 我矩(埼玉県久喜市立久喜小学校教諭)	地下 メモリアル ホール
	(iii) 誰一人取り残さない学び (社会的課題の解決) 司会 市瀬 智紀 (宮城教育大学教授) 発表 平澤 香織(神奈川県横浜市立東高等学校/早稲田大学大学院教育学研究科) 中島 光陽(神奈川県横浜市立東高等学校2年) 佐野 文昭(兵庫県立川西明峰高等学校教諭)	体育館
16:45~17:00	閉会式 第13回ESD 大賞表彰式 機物 木曽 功 (NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長)	体育館

開会式

第14回ユネスコスクール全国大会/持続可能な開発のための教育(ESD)研究大会の開催に寄せて、永岡文部科学大臣及び高際渋谷教育学園渋谷中学高等学校長より挨拶があった。

◆永岡 桂子(文部科学大臣)



第14回ユネスコスクール全国大会に当たりまして御挨拶申し上げます。

本日御参加の皆様方におかれましては、日頃から ESD の推進に御理解・御協力をいただき深く感謝申し上げます。特に教職員をはじめ学校関係者の皆様方には、新型コロナウイルス感染症対策と教育活動の両立に御尽力いただき心より感謝申し上げます。ユネスコスクールはユネスコの理念や目的を学校のあらゆる面に位

置付けて、児童生徒の心の中に平和の砦を築くことを目指す世界的な学校ネットワークです。現在、世界は気候変動や経済格差、新型コロナウイルス感染症等の地球規模の課題に直面しています。また、ロシアによるウクライナ侵略は、教育・科学・文化の分野を含めて社会経済の分断をより深刻なものにしています。このような状況だからこそ、相互の理解を深め、平和を希求するユネスコの理念を実現していくことの必要性が改めて認識されています。ユネスコの理念を学校現場で実践することを目的とするユネスコスクールの重要性は益々高まっています。日本では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点と位置付けてきました。ESD を通して、課題を自分事として捉え、自分にできることを考え行動する力を身に付けていくことは、地球規模の課題の解決にも繋がっていきます。昨年9月に開催された国連教育改革サミットでの岸田総理によるメッセージでも、日本は引き続き全力で ESD を推進し、世界をリードしていくと述べられているところです。国際的にも ESD についての理解が広がる中、我が国の ESD に関する豊かな教育実践の蓄積が今後ー層共有され、ユネスコスクールの強みであるネットワークで支え合いながら、連携・協働が推進されることを期待しています。本大会が、今後のユネスコスクールの活動と ESD の更なる推進に向けて、実りのある機会となりますことを祈念致します。

◆高際 伊都子(渋谷教育学園渋谷中学高等学校校長)



第14回ユネスコスクール全国大会開催に当たり、開催校を代表致しまして御挨拶申し上げます。渋谷教育学園は2009年の第1回大会以来、今回2度目の開催校となります。この間、日本のユネスコスクールは増え、今や1,100校を超えるまでになりました。ESD はこれからの学校教育に必須であり、その発展の為にユネスコスクール同士の交流を深めることを目的としてこの全国大会が始まりました。ESD、

SDGs は多様な世界を繋ぎ、地球という大きな船の中で持続可能な社会の担い手を育むという視点を教育にもたらしました。本校では「自調自考」の教育目標の元、協働型探究活動による SDGs を担う次世代地球市民の育成をテーマに教育活動の実践に取り組んでまいりました。生徒たちは世界に目を向け、様々な社会課題に対して自ら課題、問いを設定し学びを深めています。コロナ禍は私たち学校に大きな変革をもたらしました。デジタル技術の発展、通信環境の向上、世界に開かれた学校活動などポジティブな面も多く含まれています。日本の中高生が社会や世界に発信する機会が増えました。その活動を通じて、若者が今の課題を自分事と捉え、解決に向けて真剣に取り組んでいるということを私たち大人は知ることができました。本日はこの大会を通じて、日頃から ESD、ユネスコスクール活動に取り組んでいらっしゃる先生方、生徒の皆さんの交流が深まり、SDGs の考え方が社会に根付く一助になることを祈念しております。

ユネスコスクールとしての取組事例の紹介

「私たちが創るよりよい次世代社会」

◆発表: 渋谷教育学園渋谷中学高等学校 高校 | 年生徒

I.発表の概要

1. 「渋渋の教育」について

私たちは「自調自考」「高い倫理観を育てる」「国際人としての資質を養う」という3つの渋谷教育学園渋谷中学高等学校の教育目標のもと、地球社会の課題を自分事として考え、活動する人たちになることを目指している。そのため本校で日々行われているすべての教育活動は、地球市民として必要な力を身に着け、SDGs 達成に向けて、「いま高校生である自分たちにできることがないか」をそれぞれが考え、行動し、そして発信する機会となっている。

その中で、本日は授業と委員会活動の実践例を紹介させていただきたい。最初にご紹介するのは複数の教科が横断して行う SDGs の授業である。

2. 「高校 I 年生 教科横断型 ESD 授業」について

高校 I 年生の SDGs の授業テーマは「平和」であり、中でも最も多くの教科が合同して行っているのが2学期の「Hiroshima Project」である。この「Hiroshima Project」は、米国フロリダにある提携校が世界史の授業で使用する教材を作成するという英語の授業のプロジェクトである。

このプロジェクトではまず、さまざまな授業で広島や核兵器についての基礎知識を身に付けた後、研究を進めるため広島に現地取材に行く。そして研究班ごとに現地集合し、事前にアポイントメントをとった取材先でインタビューを行う。また、現在は新型コロナウイルスの影響で途絶えているが、広島女学院の生徒さんとの交流も行っている。

研修後、東京外国語大学に在籍する多国籍のメンターを招き、テキストとしてふさわしいものに仕上げる。そして、完成したブローシャ―はパワーポイントで先生に提出し、プレゼンテーションも行う。本校とフロリダ提携校の生徒はこのブローシャ―を自由に閲覧できる。このブローシャ―は米国の学校の世界史の授業で、実際に教科書として使用されたものである。

私たちのチームは「復興」をテーマに原爆投下前後の広島を比較した。比較を通して、米国の生徒にとっては馴染みがないであろう原爆投下前の広島と戦後の広島について学んでもらい、新たな原爆像を持ってもらうことが狙いだった。そして、単に原爆の悲惨さや被害を知ってもらうだけではなく、当時の人々の息づかいに思いを馳せてほしいというのが私たちの願いだった。調べる中で、まだまだ知らないことが沢山あるということを強く実感した。

このように、今日の広島の街並みや文化があるのは決して当たり前ではなく、多くの人々の努力によってつくられたものであることを知ってもらいたい、という思いは、多くの米国の学生の皆さんにも届いたようだ。例えば、「原爆投下という悲劇についてだけでなく、当時の人々の生活を知ることができた」、「そもそも広島が復興したことさえ知らなかった」等のコメントをいただいた。米国の学校では学べないようなことを学んでいただいて、私たちとしても改めてこのプロジェクトをやる意義を感じられた。

次に、委員会における SDGs 達成についての取組について説明する。さまざまな委員会がそれぞれ自分たちなりに 考えて活動しているが、本日は代表として図書委員に話をしてもらう。

3. 図書委員会 活動報告

図書委員会では「寄付活動とその成果」と「ビブリオバトル」の2つについて発表する。

① 寄付活動とその成果

寄付活動の「古本市」は、開校当初から本校の学園祭「飛竜祭」で行っている。生徒から読まなくなった本を回収し、 ジャンル別に分け、学園祭当日に一律100円で販売し、売上金をすべて「世界寺子屋運動」「東日本大震災子供支援 基金」に寄付するものとなっている。

古本市の成果は、2022年度では集まった古本冊数 1,659 冊、販売冊数 1,276 冊、売上 127,600 円となった 委員会内で世界寺子屋運動の支援先をネパールにすることが決定した。2015年度にはカンボジアのバボ村、2017年度にはネパールのビムシュワールに寺子屋を立てる資金として貢献した。

集まった古本冊数と販売冊数に差があるのがわかると思う。販売されなかった本は、次年度の古本市に持ち込むために図書館内に保管される。保管されている本をそのままにしておくのはもったいないということで、2022年度、図書委員会ではブックオフが運営する「キモチと。」というサービスを活用して、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会が行っている「まだ本を知らないアジアの子供たちに本を届けたい!」に寄付を行った。471冊分の 17,807 円がこのプロジェクトに寄付された。

② ビブリオバトル

・ビブリオバトルについて

「ビブリオバトル」とは、テーマに沿った本、もしくは自分が勧めたい本を一冊選び、発表し、その本についての質疑応答を行い、これを人数分くり返し、自分が一番読みたいと思った本に票を入れ、一番票が集まった本を「チャンプ本」に決定するものである。

ビブリオバトルはとても意義のある取組で、自分が知らない本に出会える。この取組を広げたいと思い、本校は 2013年度からビブリオバトルによる他校との交流を行ってきたが、世界にまだ十分広まっていないことから、渋谷教育 学園幕張中学校・高等学校、早稲田渋谷シンガポール校と3校の合同ビブリオバトルを行った。それが好評だったこと から、同時期に開催が決定した「SOLA2021」に参加し、ビブリオバトルを行うことを委員会内で決定した。

·SOLA について

SOLA とは「Shibuya Olympiad in Liberal Arts」の頭文字をとったもので、本校が開催している SDGs の知識と 意識の土台を作り、高めていくイベントである。昨年度、ESD 大賞・文部科学大臣賞をいただいた。また、2022年度には 世界 17 か国から 100 校、約900名が参加し、18 種目に分かれて競技やディスカッション等を行った。

·SOLA におけるビブリオバトル全国大会の開催

SOLA の中で図書委員会が行ったのは、ビブリオバトルの全国大会、そして英語で行う国際大会である。「SDGs の 視点」というテーマで、グループチャンプ本を3冊、そしてグループチャンプ本よりグランドチャンプ本 I 冊を決定する形式 で行った。

2年間でシンガポール、フィリピン、中国の3か国からの参加があった。参加者からは「SDGs への知見が深まった」「とても楽しいイベントだった」等、いろいろな声をいただいており、今後もこの活動を続けていきたいと考えている。

「中高生がこんなイベントを開催できるなんて信じられない」とオンラインイベントを開催する世界の人々を驚かしたこの SOLA は、高校2年生主体で行われる世界に類を見ない大きなオンラインイベントである。私たちの学年も「SOLA を やりたい」と思い学校に提案したところ、先生方の許可をいただき、8月に「SOLA2023」の開催が決定した。ぜひご期待いただきたい。

これからも私たちの活動のご支援をお願いしたい。

文部科学省からの施策説明

ESD とユネスコスクールについて~持続可能な社会の担い手の育成に向けて

◆白井 俊(文部科学省国際統括官付国際戦略企画官)

本日は ESD に関する国内外の動向について御紹介したい。

1. 全般について

・ ユネスコ (国際連合教育科学文化機関)とは

ユネスコとは、「国際平和と人類の福祉の促進を目的 とした国際連合の専門機関」である。現在、193の国が 加盟しており、先進国から開発途上国までの非常に多様 な国から構成されている国際機関である。例えば、ロシア やウクライナも加盟国である。そういった多様な場で合意 されているからこそ非常に大きな意義があると思ってい る。今日のテーマである ESD も、そうした中で各国が参 加して進めている。

ユネスコ (国連教育・科学・文化機関)とは ン ユネスコ (国連教育・科学・文化機関)とは ン ユネスコ (国際連合教育科学文化機関、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization: U.N.E.S.C.O.) は、諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関。 シ 創設:1946年11月4日 (日本加盟:1951年7月2日) ン 加盟国・地域数:193カ国 (2020年2月現在) (ユネスコ産産前文より) 職争は人めの中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを集かなければならない。相互の場置と生活を知らないことは、人間の建設を選にて世界の間に浸慮されて報告された共通の原因であり、この展表と不同のため、規入の不一数があまりにもしば、は戦争となった。ここに終りを付たあるできた場合は、人間の建設・平等・相互の重量と生意の原理を整に、これらの原理の代け、無対と領域を提出した。ここに終りを付たあるできた。大のの成の代け、無対と領域を提出した。大のの成り、自力すべての国民が相互の援助及び相互の関助及び相互によって報にされた戦争であった。 東係の政治的及び経済が支援を対ければならない。学園を表現の機能を行る、大学の成りを表現して、対のの教育とは、人間の建設により、対の成りを表現して、対のの教育とは、人間の連載を持ち、対しまが対ければならない。学園である。 東係の政治的及び経済が支援を対けるである。 東係の政治的及び経済が支援を対けるはならない等の基準を表現して、対のの教育とは、大学の経済を対して、対し、対の対域、大学の表現して、対の対域、大学の表現して、対の対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、対域、大学の表現して、大学の表現りで、大学の表現りでは、大学の表現りで、大学の表現りで、大学の表現りで、大学の表現りでは、大学の表現りでは、大学の表現りでは、大学の表現りでは、大学の表現りでは、大学の表現りでは、大学の表現のでは、大学の表現りでは、大学の表現りでは、大学の表現り

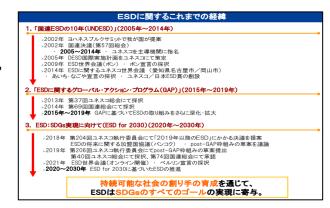
·「持続可能な開発のための教育(ESD)」

ESDとは、「持続可能な社会の創り手を育むため、現代社会における地球規模の諸課題を自らに関わる問題として主体的に捉え、その解決に向け自分で考え、行動する力を身に付けるとともに、新たな価値観や行動等の変容をもたらすための教育」ということで、まさに先ほどの渋谷教育学園渋谷中学高等学校の生徒さんはこういうことに取り組んでいると思う。この「持続可能な開発」は、政治的合意や財政的な動機、技術的な手段のみによって実現できるものではなく、一人ひとりの考え方や行動の変容が求められる。そこにこそ教育が果たすべき役割がある。



· ESD に関するこれまでの経緯

まず2005年から2014年には「国連 ESD の10年 (UNDESD)」と呼ばれるものがあり、この間に例えば「ユネスコ/日本 ESD 賞」も創設された。その後、2015年から2019年にかけては「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)」、2020年から2030年にかけては「ESD:SDGs 実現に向けて(ESD for 2030)」というプランが動いている。そして、ESD は SDGs のすべてのゴールの実現に寄与するものいうことが改めて認識されている。



・国連教育変革サミットにおける成果について

昨年9月に「国連教育変革サミット」が行われた。このサミットは新型コロナが拡大する中、特に開発途上国において半年あるいは1年程度、教育がストップしてしまった国があるということから、各国の教育に対するしっかりしたコミットメントを皆で作っていこうということで、グテーレス事務総長の主導で開催されたものになる。

その中で、各国首脳がスピーチをするチャンスがあり、日本の岸田総理もビデオメッセージを送り、「『人への投資』を中核とした「新しい資本主義」に基づき、教育変革や持続可



能な開発のための教育(ESD)を引き続き全力で推進する」と述べている。岸田総理も、ESD について非常に強 く応援している。

· 学習指導要領や第3期教育振興基本計画における ESD の位置づけ

ESD については、学習指導要領や第3期教育振興基本計画においても明記されている。例えば、小中学校の学習指導要領の前文や総則において、「持続可能な社会の創り手になることができるようにすることが求められる」ということが明記されている。第3期教育振興基本計画においてもユネスコスクールが ESD の推進拠点と位置付けられている。また、更なる「ESD の深化」を図っていくことが重要であるということが国の教育の目標として掲げられている。

教育振興基本計画については今、第4期の計画策定に向 けて議論が行われており、第4期においても ESD について引き続き盛り込まれることが見込まれている。



現在、ユネスコのプログラムにおいて「ESD for 2030」 が動いているが、この ESD for 2030 をどのように実現していくのか、各国で国内のイニシアティブを設定することが 求められている。

· ESD 推進に関する国内の動き

日本の場合は文部科学省と環境省が協力して「第2期 ESD 国内実施計画」を策定しており、その中で、特に「国際 社会において、日本が優れた実践事例を提示するなど、世 界の ESD 活動をリードしていくことを目指す」ということが 明記されている。元来、ESD は小泉総理時代に日本から提



案して各国に受け入れられたこともあり、日本がリード国として期待されている。政府としても、それに応じていかなければいけないと思っている。また、第2期 ESD 国内実施計画では、ステークホルダー(例えば、政策決定者や学習者、教育者、ユース、地域コミュニティ)ごとに具体的な取組事項について記載している。

· 「持続可能な開発のための教育(ESD)推進のための手引」(令和3年5月改訂版)

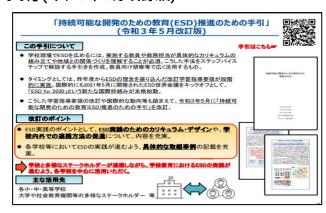
ESDと言っても、実際に学校現場でどのように進めていけばよいのかお悩みの先生方や学校も多いと思う。そうした中で、先生方に使っていただくことを想定して作ったのがこちらの手引になる。ESD実践のポイントやカリキュラム・デザイン、「学校内外でどのように連携していけばいいのか」などについて具体的事例を踏まえて示しているので、是非学校で御活用いただきたい。

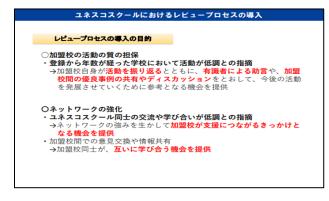
2. ユネスコスクールについて

ユネスコスクールにおけるレビュープロセスの導入

日本では既に 1,000 校以上の学校がユネスコスクール の認定を受けていただいている。世界全体で1万校程度な ので約1割が日本の学校になるが、登録から時間が経ち、 なかなか活動に結び付いていないということも指摘されている。

これまで日本では、年次報告書をご提出いただく時に学校に意向調査をしていた。認定解除を希望される学校や、2年連続して年次報告書を未提出の場合には認定を解除し、それ以外の学校については自動的に認定を継続するということで進めてきた。



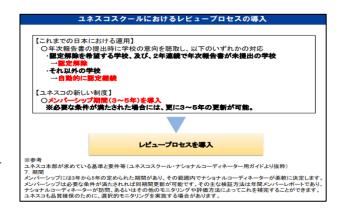


一方、ユネスコでは新しい制度として3~5年間のメンバーシップ期間(期間は各国が判断)を導入し、必要な 条件が満たされた場合に更新が可能という少し厳しめの制度に変わっている。

そうした状況を踏まえ、日本では新たに「レビュープロセス」を導入している。

ユネスコスクールにおけるレビュープロセスの導入

導入の目的には、まず「加盟校の活動の質の担保」がある。登録から年数が経った学校において活動が低調との指摘があった。確かに中心となった先生方が異動されたり、校長が変わり方針が変わったりなど、いろいろな事情があると思うが、加盟校自身に活動を振り返っていただくと共に、有識者による助言や優良事例の共有、ディスカッションを通して、今後の活動を発展させていくために、参考となる機会として、このレビュープロセスを使っていただきたい。



もう1点は「ネットワークの強化」である。渋谷教育学園渋谷中学高等学校もいろいろな学校とネットワークを作って活動されているとのことだったが、本来のユネスコスクールの目的には、ユネスコスクール同士の交流や学び合いを作っていくということがあった。しかし、この点についても必ずしも十分に行われていないという御指摘がある。そこで、このネットワークの強みを生かして加盟校が様々な支援を受けることができるようなきっかけを提供し、また加盟校間での意見交換や情報共有により、互いに学び合う機会を提供することを目的にレビュープロセスが導入

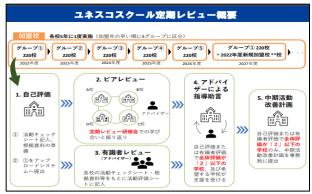
された。こうした点もレビューの中で見直していただきたいと考えている。

このレビュープロセスは学校を減らすことを目的としているものではない。これをきっかけに、実のあるものとして ユネスコスクールについて見直しを御検討いただきたい。

・ユネスコスクール定期レビュー概要

全体で1,000校以上の加盟校を、加盟の早い順に 5グループに分け、年度ごとに約220校についてレビューを行う。

手続としては、まず「①自己評価」で活動チェックシートを御記入いただき、その他資料も踏まえた上で、「②ピアレビュー」の機会を設け、「③有識者レビュー」として有識者アドバイザーにもアドバイスをいただきながら、「④アドバイザーによる指導助言」を受けて



いただく。特に、自己評価または有識者評価で全体評価が「2」以下の学校については、支援を受けながら「⑤中期活動改善計画」を作っていただくことを想定している。

5年後には1周し、新規加盟校も加わるが、レビューは繰り返し行っていきたい。

・ユネスコスクール事務局による支援

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)に委託して活動の御支援をお願いしている。ユネスコスクールの公式ウェブサイトを作成いただき、ユネスコあるいは日本ユネスコ国内委員会からの情報提供、ユネスコスクールに関するイベント情報の発信、ユネスコスクール年次報告書の収集及びアンケート調査の実施・調査結果の公表、ユネスコスクールの活動事例・教材提供、加盟校及び関連団体に関する情報提供など、さまざまな情報を御提供いただいて



いる。こちらにも多くの活動上のヒントがあると思うので、活用御活用いただきたい。

· 「『ユネスコスクールガイドブック』ESD の活動を通じて創る未来」(令和4年3月改訂)

ユネスコスクールが「そもそもどういったものか」に ついて周知が足りない部分もある。ユネスコスクール 関係者はもちろん、これから関心を持っていただく方 にも広くこのガイドブックを御活用いただきたい。



3. 予算事業について

・ユネスコ未来共創プラットフォーム事業(令和5年度予算額(案):87百万円)

ユネスコ関係の活動団体には、地域のユネスコ協会、もちろんユネスコスクール、ジオパークやエコパーク、また世界遺産を持っている自治体など、様々なステークホルダーがおられる。

地域にはそうしたステークホルダーとの相互連携のできる余地がもっとあるのではないか。特に横串のネットワークを作っていくということが本プラットフォーム事業を始めたきっかけだった。

現在、このプラットフォームのポータルサイトがあり、ユ



ネスコ関連のユネスコスクールやジオパークなどを分かりやすく見られるウェブサイトができている。地元あるいは特定の県や市にあるユネスコ関連のリソースがすぐわかる形になっているので、是非こちらも御活用いただきたい。例えば、ユネスコスクールが地域のジオパークと連携して環境教育を行っていくなど、いろいろな事例の展開が可能になるのではないかと思っている。

· SDGs 達成の担い手育成 (ESD) 推進事業 (令和 5 年度予算額(案):44 百万円)

今年は4,400万円程度の予算総額を想定しており、 3つの柱で公募を始めたところである。「カリキュラム等の開発や実践」「教師教育の推進」「多様なステークホルダーとの協働による人材育成」という3分野になる。

例年、国立大学を中心に大学や教育委員会からの 応募が多いが、過去には民間企業や NPO などからの 応募もあり、対象を限っているわけではない。採択先と しても地方自治体も含め、いろいろなところが採択先に なりうる。I件当たり数百万程度ということになるが、少



しでも ESD の活性化のためにお支えしたいので、この予算事業についても是非御活用いただきたい。

4. ユネスコ/日本 ESD 賞について

「ユネスコ日本 ESD 賞」は、ユネスコと連携して ESD 活動に取り組む機関・団体が実践する優れたプロジェクトを表彰させていただくものである。学校単位 での応募が可能で、特に「ESD for 2030」の枠組みを受ける優先行動5分野の内、Iつ以上の分野でこの活動に取り組んでいる機関・団体を表彰している。

受賞機関・団体には I 件当たり5万米ドルの奨励 金を授与している。「ぜひ日本からも良い ESD 事例の



発信を」ということで次期の推薦案件を募集している。学校関係者あるいは関係団体の方々には、是非積極的な 御応募を御検討いただきたい(締め切り2月21日)。

私からの御説明は以上となる。御清聴に感謝申し上げる。

パネルディスカッション

テーマ「SDGs を目指した学校教育・学習活動を探る~ユネスコスクールレビューより」 ◆司会進行:望月 浩明(かながわユネスコスクールネットワーク事務局長)

これより第14回ユネスコスクールのパネルディスカッション「SDGs を目指した学校教育・学習活動を探る~ユネスコスクールレビューより」を始めたい。

先ほど文部科学省からご説明があったように、昨年からユネスコスクールに加盟する学校に対する定期レビューが始まった。これは自己の活動を振り返り、さらなる活動を促す契機とすることを目的として実施されているものである。今回のパネルディスカッションでは、ユネスコスクール登録期間が長く、第1回目の定期レビューに参加された学校の中から、特色ある取組をしている学校にご発表いただきたいと考えている。

今から70年程前に「ユネスコ協同学校」というものが設立された。これがユネスコスクールの前身だが、その時代を経て ESD への理解と取組を進める形で、「ユネスコスクール」という新たなスタイルで活動がスタートしてから15年近くが経過した。その間に学校指導要領の改訂や SDGs の発表等があり、教育現場にも多くの変化が生まれてきた。日々行われている活動についてもさまざまな変化や課題が生じていることと思うが、今回のパネルディスカッションを通して、そうした課題のいくつかを解決していくためのヒントが見つかったらよいと考えている。

本日は、4校の先生方からそれぞれ特色ある取組や ESD および SDGs の視点を踏まえた取組についてご発表いただく。

◆発表:(発表順)

下山 桃子(多摩市立東寺方小学校教諭)、有馬 一彦(奈良教育大学附属中学校教諭) 村上 哲也(中部大学第一高等学校教諭)、上元 真弓(広島県立広島国泰寺高等学校教諭)

I.4 校からの発表

最初に、多摩市立東寺方小学校からご発表いただきたい。東寺方小学校は東京都多摩市にある学校で、近くには川も流れ、学校の中に学校林があるという自然に恵まれた学校である。「森を生かす・保つ」、そして「森を守る」という活動についてご紹介いただく。

■多摩市立東寺方小学校の取組(発表:下山 桃子)

1. 多摩市の概要

多摩市は東京都の南部、多摩丘陵の北端部に位置し、それを囲む河川沿いに発達する低地等により構成されている。多摩市の特徴は、日本最大規模の多摩ニュータウンが多摩市南部から稲城市、八王子市、町田市にまたがって開発されたことにある。

2. 多摩市の ESD·学校の取組

多摩市には小学校17校、中学校9校があり、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するために、ユネスコスクールとして ESD を推進している。

多摩市ではすべての市立小中学校がユネスコスクールとして ESD に取り組んでおり、「2050年の大人づくり」をキャッチフレーズに「総合的な学習の時間」を中核として内容の見直し、改善を継続的に図りながら ESD の充実と発展を目指してきた。平成23年度から議会の理解を得て、各学校での ESD の実践が飛躍的に進んでいる。令和2年には

多摩市議会と共に多摩市気候非常事態宣言を表明し、より一層の推進に努めている。

3. 東寺方小学校の ESD

市の方針を受けて、本校においても学校周辺の自然環境や人材を生かした ESD に取り組んでいる。本校の環境について簡単にご説明する。

本校の校庭には「ひのきの森」という学校林があり、 子供たちの遊びや学習の大切な場となっている。

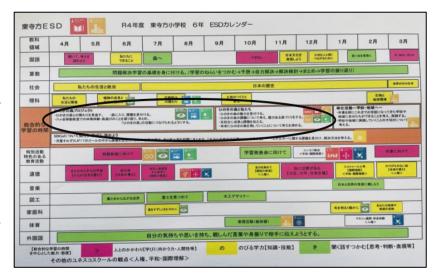
校庭からひのきの森に自由に行って、遊んだり学習したりすることができる。学校の田んぼから奥に見えるのがひのきの森である。森に降った雨が流れ、田んぼを潤している。その流れは学校の北側を流れる多摩川の支流である大栗川へと注いでいる。このようにひのきの森を中心とするビオトープとして生態系を学ぶことができる。自然豊かな環境を生かした ESD の取組を各学校で行っている。



4. ESD カレンダー

効果的にそれらの力を育むための「カリキュラム・マネジメント」が必要になってくる。本校では、豊かな自然環境を生かした「総合的な学習の時間」を中心に、すべての教科を横断的に捉え、ESD カレンダーを作成している。

私が担任している6年生では、総合的な学習の時間の「ひのきの森プロジェクト」という取組を中心にカレンダーを作成した。これからご紹介する「ひのきの森プロジェクト」は、スライドの ESD カレンダーの黒枠内に位置づいている。



5. ひのきの森プロジェクト 2022

6年生の「ひのきの森プロジェクト」の概要を説明する。まず、子供たちにプロジェクトの概要を説明し、「ひのきの森フィールドワーク」を行うところからスタートした。一本の木を干ばつするという作業をし、森を育てることの大切さを学んだり、地域のゲストティーチャーに来ていただいたりした。何度もひのきの森を観察することで、森の良さやマイナス点、疑問等、さまざまなことが見えてきた。それらを「PMIシート」にそれぞれが整理した。

「移動式えねこや体験」では、自然の力で作ったエネルギーだけで心地よく過ごせる小屋で、少ないエネルギーでも快適に過ごせるよう太陽光発電と蓄電池で電力の自給を目指す体験を通して、再エネと省エネの大切さや可能性に気づき、環境問題に興味を持つ児童が増えた。



こうした共通体験を通して、大きく 2 つの方向性に分かれ、自分の課題として追求していくことになった。ひとつは、森林の果たす役割や森林の持つ力に目を向け「森を生かす・保つ」という視点で学習活動を進めるグループである。 もうひとつは、気候変動や地球温暖化の中で森林への影響を考え、再生可能エネルギーに目を向ける「森を守る」グ

ループである。それぞれが個々の課題を設定した。

課題づくりで大切にしたことは、個々の児童に「目的意識を持たせる」ということである。「何のために、誰のためにその活動を行うのか」「どのような社会を目指したいのか」。それぞれがSDGsのどの目標と重なっているのか。個々の児童がしっかりとした思いや



願い、目的を持つことによって、ひのきの森プロジェクトのゴールまで、見通しをもって活動ができると考えた。

「森を生かす」グループの課題の例として、「森と人間が共生できる世の中を作る」や「ひのきの森の廃材を使って小物を作りリサイクル可能な社会にする」等を挙げているが、児童によって課題は異なる。「活動ありき」にならないために、児童自身がしっかりと目的や思いをもって課題を追求する学習となるよう心掛けた。また毎時間、各グループにはそれぞれの分野のエキスパートの方にゲストティーチャーとして来ていただいた。

6.学習活動の紹介

「森を守る(再生可能エネルギー)」活動に取り組んだチーム~「子供たちが調べた発電方法」

目標を12月10日の聖蹟桜ヶ丘駅前で行う再生可能エネルギーを使用したイルミネーションの点灯式に設定し、点灯式に向けて、どのような発電方法を試したいかを調べるところから始めた。

さまざまな発電のアイデアの中で、次の4つの方法を試した。

子供たちが調べた発電方法

- ·太陽光発電
- ・風力発電
- ・水力発電
- 果物による発電

・太陽光発電チーム

小型の太陽光パネルをリード線につなげ、段ボールに固定し、発電できているかを計測しながら発電を行った。大型の太陽光パネルを設置し、発電したものをバッテリーに充電していった。

・風力発電チーム

ペットボトルや紙コップ等さまざまな素材を試し、それぞれが作ったものを土台にセッティングし、発電を試した。

・水力発電チーム

学校の北側を流れる大栗川を利用して行った。4グループに分かれ、それぞれがタブレット端末を活用して水車の作成方法を調べ、牛乳パックやペットボトル等を活用して水車を作成した。川のどこに設置するか、どのような水流の場所がふさわしいか等を探りながら、何度もトライ&エラーを繰り返しながら進めていた。初めからうまくいったチームはひとつもなく、うまく回らなかったり、思うように発電できなかったりというようなことを繰り返しながら進めていた。

写真は、充電式の乾電池にどれくらい充電できたか電圧を測っているところである。このチームは「もっと充電量を上げるためにはどうしたらいいか」を考え、モ

ーターを増やしたり、石の置き方を工夫して水流を起こしたり等、さまざまな工夫をしていた。

・果物発電チーム

果物発電チームは、「庭になっているレモンを活用できないか」というところからスタートした。校庭のザクロの実でも発電できるのではないかと疑問を持ち、実験を進めていた。さまざまな材料で発電量を試し表にまとめた。

このように、それぞれのチームで協力して発電した電気を使って、12月10日駅前でのイルミネーション点灯式に臨んだ。このイベントには市内4校が参加し、各学校で取り組んだ活動を紹介するとともに光のメッセージを発信した。本校からは、発電に取り組んだ実行委員が「未来ヲ拓ク一歩」というメッセージを発信した。「未来を拓くのは他の誰でもない私たち一人ひとりなのだ」という言葉で、自分たちの活動の意義を市民に訴えた。

イルミネーションは I 週間点灯され、I 週間後にメッセージのパネルが学校に戻ってきた。それをさらにフェンスに掲示し、通行する地域の方にアピールした。ひのきの森プロジェクトで自分たちが活動したこと、再生可能エネルギーに興味を持ってほしいこと、エネルギーを大切にしてほしいこと等、メッセージも自分たちで考えた。



7. まとめ

現在は、それぞれの課題を追求した成果をまとめ、「誰に向けて、何のために、どんなことを発信したいのか」を考え、 さらに学習を進めているところである。

以上で実践紹介を終わりたい。

■奈良教育大学附属中学校の取組(発表:有馬 一彦)

本日は、本校の ESD の取組、特に昨年度、新たに発足させた「ユネスコクラブ」の活動についてご報告する。他校にも活発に活動されているユネスコクラブがあると思うので、本校からは部活動の方策が本校の教育活動に与えた影響についてご報告したい。

1. 奈良教育大学附属中学校の様子

本校は、奈良公園や東大寺、興福寺、平城宮跡等、古都奈良の文化財を見渡す小高い丘の上に立つ学校で、世界遺産、古都奈良の文化財に囲まれた場所にある。全校生徒数は約400名、各学年の通常学級 4 クラス、特別支援学級1クラスの5クラス編成の中規模校となっている。

2. 本校の教育の特徴

本校の教育の特徴には、「探究的な学び」と「『持続 可能な社会の創り手』の育成」の2つがある。

1) 探究的な学び

「つ目の特徴は、3年間かけて取り組む「探究的な学び」である。「年生では探究に必要な基本的スキルを学ぶ。マインドマップの書き方やテーマ設定の仕方、レポートのまとめ方等、少人数グループでのディスカッションや発表等も取り入れ、探究学習の基礎や姿勢を身につける。



2年生では多様な調査方法やフィールドワークの手法等を学び、大学の研究室等を訪問することでより深く学ぶ体験を積んでいく。特に地域社会に出ていく活動を重視し、実社会で学ぶことを大切にしている。

3年生では学びの集大成として、個々の研究テーマで卒業研究に取り組んでいる。成果をまとめ、全校に向けて発表を行う。

2)「持続可能な社会の創り手」の育成

もう一つの特徴は「ESD」である。奈良教育大学は2007年に大学として初めてユネスコスクールとなり、翌年、附属中学も加盟させていただいた。それ以来、ホールスクール・アプローチの手法で学校の教育活動のさまざまな場面で、ESD・持続発展教育に取り組んできた。今年でユネスコスクール加盟 I5 年目になる。I5 年というと今の中学 3 年生と同じ年で、そう考えるととても長く感じる。SDGs が認知されるにつれ、本校の ESD 活動に対する周辺からの理解も増してきたように感じる。

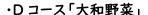
〈1・2 年生の合同奈良めぐり「奈良をフィールドにした課題解決型学習」〉

学校パンフレット「持続可能な社会の創り手の育成」に掲載されているのは、「I・2年生の合同奈良めぐり」の写真である。 I・2年生を7グループ (A~G) に分け、「奈良をフィールドにした課題解決型学習」コースを作成している。奈良を題材に何を学ぶのかは各先生に任され、毎年、試行錯誤して進めていただいている。今年のコースから2つご紹介する。

·Aコース「奈良の文化財から未来を考える」

国立奈良博物館の学芸員さんと共同で、「文化財を守る」をテーマに学習コースを組み立てた。学芸員さんからは文化財保

存の技術や管理方法について教えていただき、持続可能な文化財保存等について現地で詳しく学んだ。



地元農家のご協力で、大和野菜の現状や出荷されない廃棄野菜の問題、地産 地消について学び、「中学生の考える大和野菜の活用方法」に関するプレゼンテ ーションを地元の食品加工会社に行った。生徒らは本格的なレシピを提案してくれ た。また、中学生の柔軟な発想が企業の方に喜ばれた。本取組は奈良新聞から取 材を受けた(記事紹介)。





本校では授業以外にもさまざまな学習の場を用意している。ユネスコクラブの他、希望する生徒が参加できるイベントも多数つくられ、「奈良文化財研究所バックヤードツアー」「大台ケ原・黒滝村、森林生体から考える ESD ワークショップ」「和歌山地学巡検ツアー、化石発掘と防災を学ぶ」等が行われた。

実社会で専門の方から学ぶことは生徒にとって貴重な 体験ばかりである。普段、出会うことのない自然や人との 出会いは生徒を成長させてくれると思う。

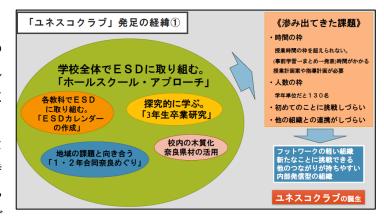


3. 「ユネスコクラブ」について

1) 発足の経緯

このように15年間、ホールスクール・アプローチの 手法により、さまざまな教育活動で ESD に取り組ん できた。学校全体や学年単位で学びを行うことで、広 く全体に ESD の学びを広げることができる。

しかし、課題も出てきた。授業ではどうしても時間と 人数の枠に縛られるということである。平日の授業時 間内に活動を納めなければならず、できることが限ら れてくる。活動するにしても、学年130名の大人数で



動くとなると費用やキャパ等に制限がかかる。また、授業では事前の計画立案が必要になり、できる活動が限定されて くる。

そこで、より少人数で放課後や土日を使い、「もっと自由に活動ができないか」ということでユネスコクラブの発足を 考えた。小人数の部活動だとフットワークが軽いため、新しいことに挑戦しやすく、学習の幅が広げられるのではないか。 また教師が伝えるばかりではなく、ユネスコクラブの生徒が全校生徒に伝えることにも期待した。

発足に際しては、そもそも「ユネスコクラブとは何をする部活か」を考えるところから始めた。活動理念は、ユネスコの理念である「平和な世界の実現」と「持続可能な社会づくり」を目指す部活動として位置づけた。そして「学び」「考え」、そして「行動」につなげることを明言している。そのため、自分たちが学ぶことで終わらず、必ず社会に広める行動をすることを掲げている。

2) 活動内容の紹介

ユネスコクラブの活動事例について、「近畿 ESD コンソーシアム 子どもフォーラム」(昨年12月25日開催)での発表用に生徒が作成したスライドを使用してご紹介する。尚、ユネスコクラブの部員数は現在、3年生2名、2年生7名、1年生6名の15名で、全員が他の部活動と兼部の状況にある。

・アースディ奈良への参加:

昨年4月、奈良公園で開催された「アースディ奈良」に参加し、自分たちの活動を報告した。奈良市長とも対談でき、生徒からは「ESDを学べる施設を作ってほしい」と要望させていただいた。

·「T シャツエコバッグ」作り:

廃棄されるTシャツを利用して「Tシャツエコバッグ」作りをした。まず、ユネスコクラブの 生徒が実践した後、全校生徒に呼びかけ、ワークショップを開いたりしている。

・紙漉きへの挑戦:

使い終わった牛乳パックを使って紙漉きに挑戦した。活動を通して、牛乳パックの紙には ピュアパルプが使われていることがわかり、できた紙でユネスコクラブの名 刺を作ろうと考えている。

・循環型のミニ生態系づくり

校内に2か所、アクアポニックスという農業と漁業を循環させて行う方法の 水槽を設置した。下の水槽でメダカを飼い、その上で植物を育てる循環型の ミニ生態系を作った。持続可能な農業や漁業について考えるきっかけになればよいと考 えている。生徒たちからは、水の音や植物、メダカに心が癒されると好評である。

・防災学習への取組:



東大寺にて、過去の火災の経験や最新の防災設備、日々の防災の努力についてお話を伺った。奈良市消防局では文化財活動の消火活動の生々しいお話を聴いたり、訓練用に造られた模擬仏像「守ろう君」を実際に運ばせてもらったりした。

·広報活動:

ユネスコクラブの活動内容を全校生徒に知ってもらうための掲示板を校内に設けている。文化祭でも展示コーナーを設け、活動内容を広報した。

・世界遺産学習交流会での活動:

奈良市教育委員会の世界遺産協議会が主催する世界遺産学習交流会にエントリーし、福岡県宗像市立玄海中学校とオンラインでの学習交流会を現在も行っている。生徒たちは、自分たち以外にも世界遺産を目の前に生活し、世界遺産をしっかり学んでいる生徒がいることに共感していた。

・学習ツアーの実施と学び:

部活動ができたことで、他の教員が新しい学習のアイデアを出して学習ツアーを作ってくれるようになった。例えば、理科と社会の先生が奈良県南部で自然林と人工林を学ぶ I 泊2日のツアーを組んでくれたことで、奈良県の林業と林業の持続可能性を学ぶことができた。

本校でも何か行動できることはないかと考えた結果、音楽室の天板を奈良県産の木材で作っていただくことになった。2月には全教室の机の天板が奈良県産木材に変更される。

4. まとめ

ユネスコクラブを作ったことで、他の団体や組織とつながるきっかけができた。大学のユネスコクラブやアースディの事務局、奈良県黒滝村の木材加工会社等、さまざまな団体とつながることができた。奈良国立博物館や奈良文化財研究所とは今年からつながりができた。この2年間に誘っていただいた団体とは必ずつながって活動している。

活動の幅が広がり、土日に遠方まで出かけ、宿泊を伴う

活動等もできるようになった。また、新しい活動にもチャレンジできるようになった。

まとめ ユネスコクラブを作ったことで、、 他の団体との、つながりが増えた。 活動の幅が広がった。 新しい活動にチャレンジできた。 生徒が学びを生徒へ発信することが多くなった。 ゆうたちの行動や社会が変容させられたのか? 他の団体や組織との連携を深める。

より生徒が参加しやすい部活動の在り方

生徒の情報発信の機会が増えた。学んだことを社会に広げることがユネスコクラブの命題になっているため、学んだ後は必ずどこかで発表させていただいている。

ユネスコクラブが核になって学校全体に発信することができ、生徒の中に ESD を深く考える核になる生徒ができた。 このことは本校にとって大変大きなことだと思っている。

5. 課題

課題の1つ目としては、自分たちが行動したことが社会にどんな影響を与えられたのか、これから考えていかなければならないと思っている。生徒には自分が努力したことだけで終わってほしくない。「努力」という美しい言葉で終わることなく、必ず成果につなげたいと考えている。

2つ目としては、活動の輪をさらに広げたいと思っている。この2年間で多くの団体や先進的な活動をしている方々とつながることができた。さらに活動の幅を広げていきたい。

3つ目としては、もっと多くの生徒に参加してもらえるような部活動を目指している。現在の部員数は兼部 I 5名で、運動部の生徒はなかなか参加しにくい状況にある。今後はもっと多くの生徒にユネスコクラブと関わりを持ってもらいたい。

最後に、本パネルディスカッションに来ることを先週、ユネスコクラブの生徒に報告したところ、非常に喜んでいた。東京土産に何が良いかと生徒に尋ね、僕の方から「東京バナナはどうか」と聞いたところ、生徒が「先生、東京バナナは東京で作っていませんよ」とたしなめられた。ユネスコクラブの子供たちは非常に成長していると思っている。

司会)

すごく良い活動だと思う。私も高校の教員をしているが、生徒の力はこちらが思う以上のもので、いろいろなことを発見したり、やってくれたりする。そのような子供たちが自主的に活動できる場というものは、高校はもちろん、小学校でも高学年なら可能なのではないか。そうしたところからユネスコスクールがさらに発展していくのではないかと思う。

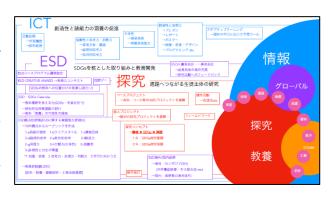
■愛知県中部大学第一高等学校の取組(発表:村上 哲也)

今、本校で行っているコンセプトを凝縮したような短い動画を見ていただいたが、今日は仕組みづくりを中心にお話 したい。

TVISIONS AND MISSIONS

1. ユネスコスクール活動方針

先ほどご紹介いただいたが、本校は今年度、「ESD 推進部」というものを立ち上げた。本校は2008年度にユネスコスクールに加盟した後、なかなか組織立った活動を進められず、あちこちの分掌でやれることをやっていたが、ようやく活動や意味も認知され ESD 推進部を設置できた。業務としては、ユネスコスクール関連や ESD 推進・支援、教育開発、学外連携、国際交流等があるが、今日は特に「探究」を中心にお話ししたい。



ユネスコスクールの活動テーマとユネスコの理念「平和」は、そういうところに立ち向かう人材を育成していくという意味で、本校の建学の精神「不言実行あてになる人間」に適合すると思っていた。そこで、自分が ICT 担当をしていたこともあり、コンセプトを一緒にしてしまおうと思い、「ICT×ESD×探究」の3つを大枠に、本校で定めた10の「ESD 資質・能力」(大学や社会で求められる力)を育成できないかと考え、コンセプトを定めた。

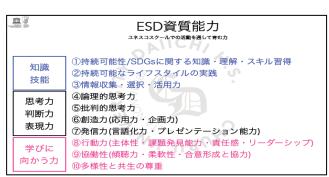
この表には、3つの領域の詳細を示している。一番外側に「ICT」という生徒の創造性や能力、また活動をスムーズにするものがあり、その中に「ESD」がさまざまあるが、SDGs を核とした取組と今年度は「探究」を中心に教育開発に力を入れている。

探究では、生徒の「進路」を意識している。ここで一番大事なのは進路だと思っているので、いい形で繋がらないかということで探究中心に生徒の興味関心を広げたいと考えている。「教養」「グローバル」といった本校の学校設定科目も組み込んである。また、創造工学科もあるので「STEAM教育」等も絡めながら探究的な学びを考えている。

2. ESD 資質·能力

1) ユネスコスクールでの活動を通して育む力

今年度から「ESD 資質・能力」を明確に位置づけ、資質・能力調査や探究の評価等、さまざまなところで評価していこうという体制になった。また、3つの観点(「知識技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」)の評価を細分化した。



2) ESD 海外研修を通した資質・能力の変容—資質・能力評価システムの原型

2018年度にカンボジアで海外研修を行った。それ以降は新型コロナのために行けなくなったが、今年度は4年ぶり に海外研修を実施できそうだ。

先の海外研修前に「この研修でこういう能力をつけてください」ということで、ESD に関わる資質・能力を8つ定め、 研修前後で自己評価してもらい比較したところ、短期間でも自己肯定感や自己評価が大分変ってきた。つけるべき能力を明確にして取り組んでいく体制が有効だと思ったことがきっかけになっている。

3. カリキュラム

1) 授業・シラバス

SDGs は授業内に位置づけている。本校にも部活動やコースごとの取組、希望者の研修等があるが、できるだけ全体で SDGs の達成に向けたことができればよいと考え、シラバスの中にも各教科で SDGs を位置づけている。しかし、教科によってはアプローチしにくい場合もあるので、来年度からは資質・能力の重点項目と合わせて、シラバスの見せ方や位置づけも 変えていこうと検討している。



2) ESD・SDGs カレンダー

この ESD·SDGs カレンダーは、先ほどのシラバスの計画を SDGs ベースで、学期の中間期末の考査ごとに拾っている。これをもとに教科横断の可能性を検討してほしいとしている。本来は年間計画として定めておく方がよいが、本校の場合は自由度が高い方がうまくいくと感じているため、今年度はこれを提示し、SDGs、教科内容、あるいは資質・能力でもよいので、「試験的にさまざまな横断をやってみよう」ということで、公開授業や研究授業等も行いながら検討している。

4. 探究

1) コンセプト

今年度、カリキュラムが変わったのでコンセプトも大きく変えた。試験的に昨年までやってきたこと、「興味×SDGs×進路」をベースに探究を進めていこうという体制を作った。学年のフローはスライドの通りで、独自の教材を順に作っているところである。生徒用のテキスト、ワークシート、そして教員用の指導案を作成しながら進めていく。

探究で難しいのは「テーマ設定」にある。テキストもいろいろあるが、テーマを深めていくところが最も難しく、単純



作業でできるものでもない。そこで、最初にご紹介したコンセプトに合うような形でワークシートやワークフロー等を作り、 どうしても授業内でテーマ設定が難しい場合は、「探究アドバイザリーアワー」を長期休業中等も定め、生徒に来ても らってヒント等を出すような体制をとっている。

2) 目的

先述の通り「進路意識の向上につなげたい」ということで、フィールドワークや実験・データ分析、創作・デザイン等をできれば含めて、調べただけで終わらないように仕組みを作っている。

3) 探究テーマ例(2021年度)

こちらがあれこれ言うより、生徒にやりたいことを自由な発想でやらせることによって、意外によいものや特色的なテーマが出てくるので、それを生かして「道筋を立てる」ことを手伝っている。こちらが考えていなかったような発想が出てくるので、このやり方がよいと思っている。

掲載事例は昨年度、愛知県ユネスコ交流会活動実践に発表したものの抜粋である。マインクラフト等を使って道の駅をデザインした他、フェアトレードの商品販売について「売れなければ意味がない」ということで、売る方法を考えようと IOT デバイスを使って来場者数を分析する等、さまざまな取組を行った。

探究

探究テーマ例(2021年度)

完全自動運転車の実現に向けて-ローカルルールの視点から-

香りのブレンド-分子化合物の構造の比較分析-

売れなければ国際支援にはならない

-フェアトレードにおけるIoTデバイスを用いたデータ収集と分析-

地産地消チャーハンの開発とブランディングとマーケティング

地域の特性を生かした建築デザイン-日進市の都市開発と経済発展-

街並みに合わせた自販機を観光資源として有効活用するには

4) 成果発表

生徒が発表したり、交流できたりする場があると良いと思っているので、できるだけそういった仕組みを作るようにしている。1月は「ESD 大賞発表会」、2月は「一高発表会」を設け、昨日は ESD 発表会を行ってきた。過去最高の約18 団体が発表し、さまざまな取組が紹介され、交流につながった。

今年度から「ESD コースプログラム履修」を定め、研修等、さまざまなことを行っている。本校の ESD プログラムを通して探究的に学んできた生徒をもう少し評価してあげたいということで、特定のプログラムに継続的に参加し、最後に独自の研究レポートを提出し、発表、口頭試問を経て認定された生徒を「ESD コースプロブラム履修生」として認定しようという動きをつくった。2022年度は3テーマ、4名を第1回の履修生として認定した。

さらに、「ESD CREATIVE AWARD」というものを作った。よく言われることに「研究発表や探究と言っても難しい。 全員ができるわけではないし、もう少し簡単にできるものはないか」というものがある。ESD 資質・能力を定めたので、 表現力に特化したコンテストがあってもよいのではないかと考え、この賞をつくった。キャッチフレーズは「自由に、描け」 で、自由な発想でテーマを解釈し、表現するコンテストである。昨日、発表してきたが、今年は74作品の応募があった。 初回から高いクオリティで審査に何時間も要し、評価のところで逆にこちらが試されていると感じた。

·ESD 研修概要~ESD 国内研修/ESD 海外研修

「ESD 研修」という発展的な探究の学びの場を設けている。国内は白馬村で「企業研修」、海外はカンボジアのシェムリアップという場所で「世界遺産修復活動」「寺子屋交流」というものを行っている。

国内研修の白馬村では、企業を訪れて大人とディスカッションするということをコンセプトに、4~5 企業プラス役場の 方々とディスカッション・交流・発表等を行っている。

海外研修は4年ぶりに今年3月に行く予定だが、バイヨン 寺院(世界遺産)修復活動や寺子屋の交流等々から国際 的な学びを進めている。

5. 成果発表~活動発表とWEB

ユネスコレビューで評価いただいたのは「成果発信」だと 思うが、本校は私学なので他校と差別化した活動をしなが ら、学校の活動発信をすることが大事だと思っている。 成果発信

生徒:外部発表の機会の充実

=資質能力の育成と交流の場

愛知県ユネスコスクール交流会などの成果発表会及びワークショップなど

学校:活動発信の多様化 =学校のプレゼンスの向上と外部連携

イベント・公開講座・活動事例集・ESD通信・WEB(SNS)など

学校のホームページが使いにくかったので違う形にできないかと思い、独自に ESD 専用ページを作った。本校のホームページからもアクセスできるので、後ほど見ていただけたらと思う。インスタグラム等も使いながら、ESD やユネス

コスクールに関わる活動についてさまざまな紹介ができるようにしており、生徒の発表等も一部掲載している。来週中には先述の発表会や「ESD CREATIVE AWARD」の結果もこちらで公表していきたい。

6. 課題

1) 学校間発表

課題には「学校間ネットワーク」がある。今日も度々話題に上がっているが、担当者が変わり継続的にうまくいかないケースもあり、本校でも立ち消えになっているものがある。

2) 普通科の新しい教育(2023年度2年次より)

新2年生から新しいコース編成になり、学校設定教科「教養総合」という教科横断型・高大連携型の授業が入ってくる。もうひとつは、文系理系コースに加えて「グローバル系」というものを作るので、グローバル科目等も含めて、教科横断、ICT、また高大連携等々を取り入れながら、さまざまな力の涵養につながればよいと思っている。

3) 生徒の進路を見据えた仕組みづくり

生徒の進路を見据えて、今あるものを再編集しながら仕組みづくりをしている。新しいことを始めようと言ってもなかなか難しい。既存のものを組み合わせて、新しい価値や新しい教育活動につながればよい、そしてそれが時代に応じたものになればよい、という形で取り組んでいる。

これで本校の紹介を終わりたい。

■広島県立広島国泰寺高等学校の取組(発表:上元 真弓)

1. 広島国泰寺高校の概要

初めに国泰寺高校の概要と SDGs に関わる探究活動の関係についてお話ししたい。

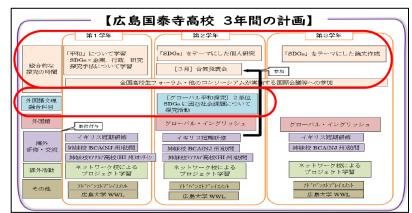
1) 歴史

本校は広島市の中心部に位置し、前身は広島一中、戦前からの歴史を持つ学校である。平成 | 4年度から | 3年間、SSH の指定を受け、昨年度までの3年間は WWL の指定を受け、これまでさまざまなカリキュラムを開発してきた。国泰寺高校の伝統を大切にするという部分と、社会の変化に応じるという流行の部分をともに大切にしながら教育を進めている。

2) 取組

本校の取組は WWL 事業の継続から、「イノベーティブなグローバル人材」の育成を目標にしている。そこでは持続可能な社会の構築や世界の平和と発展に貢献できる人材を育成するだけでなく、広島だからこそできるグローバル人材の育成を目指した。

広島だからできるグローバル人材の育成のために、本校がこれまで取り組んできた原爆慰霊



祭のような平和に関わる活動と、課題発見解決学習の探究活動をリンクさせ、体験化して行うことにした。探究活動では、戦争に対する「狭義の平和」と、世界が抱える社会問題の解決を「広義の平和」と捉え、SDGs をテーマに「平和」で「持続可能な社会」の実現を目指すようにした。

この目標のもとに、課題解決のために必要な資質・能力を7つに整理して、これらが育てられるような授業、学校行事、 課外活動等のカリキュラムを開発してきた。

本校の3年間の計画の中で、今日は SDGs と特に関係が深い「総合的な探究の時間」と「グローバル平和探究」と

いう授業についてお話しする。

2. 実践内容

1) 実践例:総合的な探究の時間(夢探究)

この授業では3年間かけて課題発見解決型の探究活動を行う。

・第 | 学年: 「基礎」 ~平和について概括的に、多面的・多角的に考える

Ⅰ年生ではまず、平和記念資料館を訪れレポートを書き、「狭義の平和」である「戦争」と「平和」について考えていく。Ⅰ 学期には、主にミニ探究あるいは探究試行ということで、探究活動を一度回してみるということを行う。

2学期に入ると SDGs を取り上げ、生徒の視点を「広義の平

【実践内容①-1 総合的な探究の時間(夢探究)】

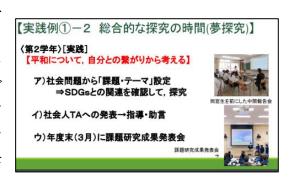
(第1学年)[基礎]
【平和について概括的に、多面的・多角的に考える】
ア)「戦争」対置「平和」 平和記念資料館見学
イ) SDGsを知る「SDGsカードゲーム」実施
ウ) SDGsと「平和」
企業×SDGs、行政×SDGs、大学×SDGs

和」へ移し、「SDGs カードゲーム」体験をする。その後、企業×SDGs、行政×SDGs、大学×SDGs というように講演会を持ち、実際の社会で、企業や行政、大学を訪問し、大学の研究室で社会課題や平和につながる活動として、どんなことをしていくのか生徒たちは理解していく。

1年生の間は、身近の気になる社会課題を記録して、共有し合う授業を帯のように継続して行っていく。探究の課題を見つけるという大切な時期でもある。

・第2学年:「実践」~平和について、自分とのつながりから考える

2年生では、それぞれが身近な社会課題の中から課題やテーマを設定し、自分が設定したテーマと SDGs の関連を自分たちで確認し、そこから研究を始めていく。生徒たちは個人研究によって課題の解決策の提言まで行う。中には、「こうしたらいいのではないか」という提言を行った後、実際にテーマに関連する人たち(企業や保育園等)に話を聞きに行き、やり直す生徒もいる。



2学期9月末には、社会人 TA(ティーチングアシスタント)として、さまざまな分野で活躍されている本校の同窓生に来てもらい指導・助言をいただく。年度末には全員、課題研究成果発表会を行う。

・第3学年:「深化」~平和について、今、何ができるか、今後どのように関わっていくかを主体的に考え

実行する

3年生では課題研究の内容を論文にまとめ、さまざまなコンクールに出すなどしている。また3年間の成果として、「平和な社会をつくるために、高校生に何ができるか」というテーマでディスカッションを行った後、これまでの自分の取組を振り返ってまとめることで、この授業を終える。

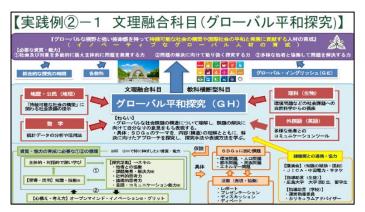
【実践例①一3 総合的な探究の時間(夢探究)】 〈第3学年〉[深化] 【平和について、今、何ができるか、今後どのように関わって行くかを主体的に考え実行する】 ア)論文の作成→コンクールへの出品 イ)研究の振り返り=メタ認知「私の学びの木」作成 =今後の自分とSDGsとの関わりを意識

最後は「私の学びの木」という I 枚のポートフォリオに、下から中学校の時の自分、高校3年間の授業や部活動、 課外活動等、校外の活動も含めてやってきたことを書きだしてまとめ、一番上には自分と SDGs との将来の関わり 方を書くということで、生徒たちの視点を今後の自分の SDGs との関わりを意識させた状態で終わる、という流れになっている。

2) 実践例:文理融合科目(グローバル平和探究)

文理融合科目の学校設定教科「グローバル平和探究」という科目の紹介をする。この教科は、地理、理科、数学、英語を合わせた科目で、第2学年、週2時間の必修科目である。

年間計画ではSDGsに関係する「環境問題」「都市・貧困問題」「エネルギー問題」等をテーマに、年間70時間で授業を計画している。それぞれの単元で、プレゼンテーションの実施(例えば、環境問題の場合は広島大学留学生に英語で行う)、BOP ビジネスプランの作成、ディベートやディスカッショ



ンの実施等、パフォーマンス課題を設定している。また、授業であるため、学期末には期末テストや定期考査も行っている。

具体例として「エネルギー問題」の単元をご紹介したい。まず、「日本において望ましい電力エネルギーは何か」というテーマを掲げ、4教科から知識や情報を提供し、外部の専門家からエネルギー事情についての講演会をしていただいた。それらの知識をもとに生徒たちがディスカッションを行う。

今年は福島県立ふたば未来学園の皆さんにご来校いただいた際にディスカッションを行った。その後、さらに「日本は原子力発電所を2050年までに廃止すべきである」というテーマで、ディベートを実施した。

3. 成果と課題

1) 成果について

①「問題」を解決するための「課題」は何か?=「問題」「課題」が捉えやすかった

まず、生徒たちに SDGs を大いに意識させることができたと思う。また、SDGs を「望ましい姿」としたら、現状との間にあるもの「差」が問題で、その問題を解決するためにある事柄が「課題」だというように、SDGs を用いることで、「理想と現状」「問題と課題」が捉えやすくなった。教える側も学ぶ側も捉えやすくなったと思う。

① 成果 — 1 P) SDGs (=望ましい姿)と現状との差 =「問題」の存在 - 実際問題」と捉える その「問題」は どこで? どのように現れている? 「問題」を解決するための「課題」は何か? =「問題」・「課題」が捉えやすかった

② グローバルな課題を手元に引き寄せる=自分事として捉えることができた

世界にはさまざまな課題があり、多くの課題を解決するためには富や資源の再分配し、歴史や文化遺産の継承が必要である。これらは地球規模の大きな問題だが、解決のために、人ごとではなく「自分はどう関わるか」「自分事としてどう考えるか」を、一回考えることができたことが成果だと考えている。

①成果-2

イ)グローバルな課題を手元に引き寄せる

さまざまな問題=「分配と継承の問題」

「現実的に解決するため」⇒「自分がどう関わるか」

=自分事として捉えることができた

先ほどお見せした「育てたい資質・能力」のルーブリックを作り、自己評価した結果、生徒も教職員も力がついたと評価している。

2) 取組の課題について

① 「行動」にどのようにしてつなげるか。

Iつ目は、これらの活動を「行動」にどうつなげるかということである。生徒たちは確かに意識が変わり、ニュースを見てわからないことがあれば調べるようになった。また、原爆ドーム前の抗議運動について理解できるようになり、もっと調べて「反対意見を持つ人はどういう人なのか」を考えるようになった。新聞の取材を受けたときにも「調べる」と話しており、「ずいぶん変わったんだな」と実感した。

しかし、校外の活動として「高校生平和大使」になる生徒等も出てきてはいるが、まだ一部である。もっと多くの生徒が「学び」を「行動」に結びつけられるような働きかけが必要だと思っている。

② 「総合的な探究の時間」と「グローバル平和研究」相互の転用・応用

2つ目に、本校のさまざまな活動の相互の応用がもっと進んでほしいと思っている。SDGs という共通のテーマの中で、生徒の中で相互の学びが往還するようになってほしい。「グローバル平和探究」はグループ活動だが、「総合的な探究の時間」の学習は個人なので、個人の学習においてもグローバル平和探究のところで学んだスキル等を出してほしい。応用がかなり進むようになってはきたが、もっと深まるように働きかけが必要で、「カリキュラムマネジメント」をしていく必要があると思っている。

③ ファシリテーター(教員)にとって「持続可能な方法」の案出

3つ目に、ファシリテーターとしての教員の質・能力を上げることがある。教員の SDGs に対する理解や、ディベートやディスカッション等のパフォーマンスに対する理解を進める。教員にはファシリテートする能力が不可欠である。一方で、持続可能な取組にするためには、多くの教員が受け持てる内容にするべきだというジレンマもある。

以上で国泰寺高校からの取組の紹介を終わる。

司会)

まさにこういう時代であるから、生徒たちが、平和な時の「広義の平和」を考えることは非常に大事なことだと思う。

Ⅱ.質疑応答

会場から先生方へのご質問をお受けしたい。

【質問1】

2つ質問がある。まず中部大学第一高等学校の村上先生にお願いしたい。本校でも支援連携部という分掌があり探究等の業務を行っており、御校の職員総数と ESD 推進部の職員数についてお尋ねしたい。

もう1点は広島国泰寺高等学校の上元先生にお伺いしたい。3年生で論文作成をされているということだが、論文の指導に当たるのはどのような先生か。全教員で担当されているのか、指導内容の深さについても伺いたい。私自身は国語科で、本校では3年生の小論文は国語科の全教員がクラスごとに担当を決めて指導しているが、小論文の指導方法やかける時間、また、どの辺まで手を入れるのか等についてお聞かせいただきたい。

◆回答:村上先生

本校専任の教員は60名弱だと思うが、その中で ESD 推進部は 8 名程度となっている。数学科はいないが、なるべく各教科の先生に入ってもらえるよう立上げの時に定めてもらった。

◆回答:上元先生

論文の指導については、「年生と3年生については教員「名が「クラスをもち、2年生では教員4名で生徒40名をもつ形にしている。2年生で個人研究を進めるときに、ほぼ論文形式の区割りになっている「レジメ」を箇条書きで作らせ、それを最後にスライドにするという形にしている。

教員4名で生徒40名を見る、つまり教員 | 名が | 0名ずつ担当する段階で、ある程度中味を指導しておき、3年生では担任 | 名がもち、3年生になってからの論文指導では細かい指導はしていない。但し、生徒同士でチェック表を作り、クラスをまたいで生徒同士で輪読することでチェックをさせ、論文の発表会という形で終えている。

論文を外に出す生徒に対しては、担任や専門の先生、あるいは関係の深い先生が添削をしている状況である。

【質問 2】

上元先生にお尋ねしたい。「私の学びの木」というものが大変気になったが、これは論文を書く前に、あるいは論文を仕上げた後、さらにまとめるために使われているのか。また、かなりの分量のように見えたが、どのくらいの指導コマ数がかかるのか。そして、論文の提出をテーマに挙げられていたが、提出先については生徒が見つけてくるのかも含めてご教授いただきたい。

質問ではないが、村上先生が話された「学校間ネットワークの難しさ」について、私も何回か諸外国に連絡したことがあるが、返事が返ってきたことがないので共感した。

◆回答:上元先生

「私の学びの木」は3年間の学びの総まとめになるので、全部終わった後に行っている。それほど時間はかからず、2時間程度で生徒たちがまとめていく。

I・2年生時に同じようなシートのワンページ・ポートフォリオを書かせており、それを見ながら、最後に中学校から振り返って自分の文章でまとめていく。担当の先生も、自分が受け持った生徒が「どんなことをしているのか、どんな成長をして、どんな希望を持っている生徒なのか」ということが IO~II月の推薦入試時にもわかるようにという意味も込めて、その時期に行っている。

論文の提出先はいろいろあるが、例えば野村證券のコンテスト等ではかなりの分量を出さなければならないため、 学校で作成している書式は問わないようにしている。論文を外に出す生徒に関してはあまり細かいことを言わずに、提 出先に合わせた形式で作ってよいと言っている。

また、提出先は生徒が見つけてくるのではなく、こちらから紹介している。

Ⅲ.講評

最後に、聖心女子大学の永田先生、福岡教育大学の石丸先生にご講評をお願いしたい。

◆石丸 哲史(福岡教育大学教授)

ユネスコの理念を実現するユネスコスクール、そして ESD の推進拠点 であるユネスコスクールの真骨頂を拝見することができた。発表の最後 の方から順に感想を申し上げたい。

広島国泰寺高校は、まさにユネスコの理念を実践されている。平和を主軸に据えて SDGs 達成に向かい、「狭義の平和」と「広義の平和」を挙げておられたが、「広義の平和」とはまさに「ウェルビーイング」ではないかと思った。OECD の「ラーニング・コンパス 2030」にあるウェルビー



イングを目指すということは、SDGs 達成に向かうことと軌を一にしているという気がした。

ESD の本質的問答として、最初に「持続不可能性に気づくか、気づかないか?」、そして「『この持続不可能性が問題である』と思うか、思わないか?」、「『どうすればその問題を解決できるか』と考えるか、考えないか?」、「この課題方法を思いつくか、思いつかないか?」、最後に「解決に向けてやるか、やらないか?」という流れがあるのではないか

と常日頃から思っている。

そうした中で、「SDGs に掲げる目標と現状との差を問題として捉える」、そして「問題解決のための課題に取り組む」という「問題」と「課題」を峻別されたところに大変興味を持った。まさに問題に気付くか気づかないか、問題の所在を明らかにできるかどうか、問題意識を抱くかどうかのスタートではないかと思う。それがあるからこそ、「じゃあどうすればよいのか」という課題解決に向かう方向性が見えたのではないかと思った。まさに SDGs 達成に向けた行動と、高校での学びをつなぐロジックをはっきりと見て取ることができた。

中部大学第一高等学校の発表では、最初のタイトルに「VISIONS AND MISSIONS」とあったが、SDGs とは「ミッション」ではないかと思っている。しかしミッションの達成に向かうと、ともすると「やらされている」感じになるのではないか。ユネスコの理念を実現する、あるいは SDGs 達成というミッション。しかし、そのミッションを果たす、あるいはゴールに向かうために「どう実現していくのか」「どう向かっていくのか」というビジョンが必要ではないか。そして、そういったビジョンこそ生徒と共有することによって学びが広がり、深まるのではないかと思った。ビジョンとミッションの両方をご披露いただき感謝している。

そして、何よりも「ESDの資質・能力」に焦点を当て、かつ明確にして評価に取り組まれていた。「指導と評価の一体化」と言われているが、ESDにおいてもこのことが実現されようとしていることに感動した。また、ESDをキャリア発達の手段として位置づけ、「持続可能な社会の創り手」を育むための大学への橋渡しが明確になっていた。国泰寺高校と共に、ESDによる高大連携の道筋をつけていただいたことは大学の



人間としては大変ありがたかった。SGH、SSH、あるいは新時代に対応した高等学校改革推進事業等が行われているが、こういった事業の中に ESD を取り組むことは大変意義がある。

このような資質・能力を育み、キャリア形成に向けた取組というのは、高等学校の3年間だけでは難しいかもしれない。 そういった意味では中等教育全体で取り組んでいただきたいところだが、奈良教育大学附属中学校ではホールスクール・アプローチをとりながら、先導的な「ユネスコクラブ」を結成し、その活動をうまく学校全体に反映されている。まさに OECD ラーニング・コンパスの「AAR(見通し、行動、振り返り)サイクル」のように、「学び」「考え」「行動する」のサイクルがうまく回っているのではないかと思った。

こうした中等教育に対して、初等教育、小学校では大変ご苦労されていると思う。何よりも SDGs に向かう上でのコンテンツは難しい部分があり、小学生の発達段階からして取り組むことが難しい部分が多いかと思う。そうしたコンテンツの限界、あるいはリアリティを求めるところから大変ご苦労があったと思うが、東寺方小学校の皆さんはリアリティを失わせることなく、うまくコンテンツを児童の次元に落とし、また中等教育につなげられる「資質・能力」も育んでいらした。まず、教材の吟味・加工をし、指導を工夫し、活動から見えてくる学習成果、まさに学びの成果を「見える化」されていた。「森を生かす・保つ、守る活動」を通して、題材としての「森」というものを児童の次元でうまく展開なさっていた。まさに「ひのきの森」というのは、子供たちにとってはエコパークのようなものではないか。そして保護と活用を一体化されていた。そういう意味ではよい学校というか、素晴らしい環境に恵まれている学校だと思った。

このように4校の取組を拝見し、すべての学校に共通しているのは、児童生徒が持続可能な社会づくりを自分事としているということ、そして学びを重視していることが挙げられる。目標性が高い ESD だけに、「活動あって学びなし」とならないように留意する必要があるわけだが、「学びとは何か」ということを改めて考えさせていただく機会をいただいて感謝している。

「令和の日本型学校教育」では、この「非認知能力」「社会受動的スキル」をどう育むか、あるいはコンピテンシー・ベースの教育をどう展開するか。「STEAM 教育」の受容性に鑑み、教科横断をどう進めるか等、さまざまな課題があるわけだが、STEAM 教育を「やるか」「やらないといけない」「じゃあどうするか」というよりも、SDGs 達成のためには

教科横断をせざるを得ないわけだ。そういう意味では、持続可能な社会づくりに向かっていく中で、結果として STEAM 教育が必要になってくるだろうし、教科横断ができるだろうし、コンピテンシー・ベースの教育の展開の重要性が改めて確認されるのではないかと思う。

「ESD for 2030」「Education 2030」、そして SDGs と、2030年に向けた教育の方向性がはっきりとしてきたような気がした。4校の皆さんに感謝したい。

◆永田 佳之(聖心女子大学教授)

素晴らしい発表だった。刺激的で、今後が楽しみなものばかりであった。皆様の成果と課題について石丸先生がわかりやすくまとめていただいたので、私からは石丸先生のご指摘も踏まえて、国際的な趨勢の中で4つの実践に共通する課題を捉え直してみたい。特にポストコロナの時代に求められる課題を中心にお話ししたいと思っている。



ESD の研究では、4つのフェーズを経て学校等の組織がサステナブルになっていくと言われてきた。初めは時間もお金もかかり面倒なことなので皆さん否定的になる。管理職の先生の反応も「今はできない」というものが多く、否定的な第1フェーズが始まる。第2フェーズでは徐々に必要性を感じ、今までの実践に「ビルトオン」で少しずつ何かを載せてみようということになる。このフェーズを特にプッシュしたのは SDGs だと思うが、とってつけたようなビルトオンで徐々に「とってつけたような実践」と批判されていく。そして、第3フェーズの「ビルトイン」では、中に埋め込まれ、内在化したサステナビリティの実践が求められる。そして最後の第4フェーズで「持続可能性の文化(Culture of Sustainability)」になる。これは、冒頭に国際戦略企画官の白井先生からお伝えただいたベルリン宣言や「ESD for 2030」の文書にも出てくるが、「持続可能性の文化になっていく」ということが非常に重要で、そこを「実践していきましょう」ということである。

本大会も14回目となり、私も第1回目から参加させていただいているが、「深化」も含めて「進化」するものだという 実感を得て、とても嬉しく発表を聞かせていただいた。というのは、第1、2フェーズを試行錯誤してきた10年以上の歴 史がユネスコスクールにあるが、今日の発表を聞いて、第3フェーズのビルトインから第4フェーズの持続可能性の文化 にシフトしていくという方向性をここまで強く感じたのは初めてである。この運動体を通して、そうした文化が少しずつ醸成されてきていると感じられた発表だった。

「第3フェーズ、そして第4フェーズへ」というのは、実は国際的にも共通の課題である。どのように第2から第3、第3から第4へ移行していくのかということだが、そのキーワードはベルリン宣言にも「自己変容と社会変容」、つまり Transforming Oneself と Transforming Society または Community とあり、Inter Twins と記載されているが、「相互作用」というのが重要であると国際的には認識されている。それが、これからのユネスコスクールのチャレンジでもあるのかと思った。

まず「自己変容」だが、4校共に生徒さんたちが素晴らしい自己変容を起こしていると思う。先ほど申し上げた ESD for 2030 のキーワードで言えば「変容的行動」になる。どの学校にも変容的行動(Transformative Action)が見られる。ベルリン宣言に関して少し詳しく言うと、「持続不可能な社会をつくってしまっている現状維持の思考と行動、さらに生活スタイルからの脱却」ということで、「脱却」と訳した元の英語には「Disruption」という IT 業界がよく使う非常に強い言葉が使われている。この宣言が出されたときには非常にハードルが高いと思ったが、今日の発表では、そこに一歩ずつ近づこうとしている力強さを感じた。

しかし課題もある。今日の4校の課題のみならず日本のユネスコスクール、そして日本を超えたユネスコスクールの課題でもあると思うが、その課題を的確に言い表していただいたのが奈良教育大学附属中学校の生徒さんたちだったと思った。「自分たちの行動で社会がどう変わったのか」という基準を自らに問いており、本当に素晴らしいと思う。こ

れは世界的なユネスコスクールの課題だと思う。その言葉にとても感動した。ESD の最前線である「ESD for 2030」には Political という言葉まで入られるほどになっているが、Social Action または System Change の方にどのように向かっていけるのか、という大きな課題があると思う。

皆さんの実践を詳しくは存じ上げていないので無責任な思いつき案になるかもしれないが、例えば、多摩市立東寺方小学校の場合は、生徒自らが電力発電を実験し、校舎あるいは地域でアピールしていった。この実践は私も存じ上げていて、OECD の気候変動アクションのお手伝いをしていた時に、日本の実践の代表として挙げさせていただいた。また、グラスゴーでの COP26 大会でも取り上げられ、国際的にも評価された実践である。ここまで実践ができているわけだから、例えば校舎の一部や地域で、または多摩市全体のやりやすいところで実装化していただく等、小学生からチャレンジが出てきてどうしていけないのかと思っている。実際、海外には幼稚園児が ESD をやっている事例もあり、ゴミ捨て場を公園にした等、園児の声から社会が変わっていったという力強い実践がある。日本でもそうした実践が出ればよいと思う。

奈良教育大学附属中学校の場合にも魅力的なものがたくさんあったが、例えば、生徒たちがミニチュアのエコモデルを自ら作っているということだった。その一部でもいいので地域で実装化してみるのもひとつのアイデアかと思う。

中部大学第一高等学校の場合は白馬村の実践があった。いろいろな企業と活動されているので、ぜひ企業とのコラボ商品の開発や高校生が売上に貢献する実践等にも取り組まれてほしいし、すでに実践されているかもしれないと思った。

広島国泰寺高等学校の場合は素晴らしいグローバル平和教育の実践をされていて、国内の学びを国際協働学習 (インターナショナル・コラボラティブラーニング)にまで発展させる素地がすでにあると感じた。エネルギーでも食糧でも平和でも結構だが、国際交流レベルにとどまらず、海外の学校と同じテーマのもとで共に問題解決をしていく、ぜひそこに挑んでいただきたいと思った。

最後に申し上げたいのは、世界中のユネスコスクールがソーシャルチャレンジにどう取り組むのかに悩んでいるということで、今日はそのヒントもいただいたと思っている。東寺方小学校は多摩市と一緒に気候非常事態宣言を発信したということだが、「つくる」というプロセスが非常に重要だと思っている。ベルリン宣言でも「環境と気候アクションをコアカリキュラムのコンポネントにしなさい」と謳われているが、ほぼ同時期に文部科学省と環境省の連名で出された通知「気候変動問題をはじめとした地球環境問題に関する教育の充実について」(2021年6月)は非常に重要な通知で、そこでも気候アクションが求められている。ユネスコスクールでは、日本そして世界をリードする形で若者や未来世代がこうした宣言をつくることによって、ソーシャルチェンジにつなげていただきたい。数値的な目標設定を据えてもよいし、希望的なビジョンを述べていくという宣言もある。自己変容にとどまらずに社会変容にシフトしていくことが期待される。その期待に十分に応えられる、そんな実感をもたらしてくれたご発表だった。皆様に心より感謝している。

司会)

これでパネルディスカッション「SDGs を目指した学校教育・学習活動を探る〜ユネスコスクールレビューより」を終了したい。本日の発表校の特色ある取組や ESD・SDGs に関わる取組を、ユネスコスクールおよび関係者の皆様の、今後の活動のご参考にしていただければ幸いである。

ご発表、そしてご講評いただいた先生方、会場の参加者の皆様、またオンラインでご参加いただいた皆様に感謝申し上げたい。

ランチョンセミナー (企業・団体による情報提供)

株式会社 ファーストリテイリング

"届けよう、服のチカラ"プロジェクト

● 概要

「"届けよう、服のチカラ"プロジェクト」は、全国の小・中・高校生が主体となって行う子ども服りサイクル活動です。2 006年より UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の協力を得て、難民の方々に、店舗で回収した服を届ける活動をスタート。その中で子ども服が慢性的に不足している状況に対して、「服の会社としてできること」を考え、全国の店舗と地元の学校が連携する形で、2013年に本プロジェクトが始まりました。

● サステナブル教育を実施する上での課題

昨年のユネスコスクール全国大会にて「学校でサステナブル教育を実施していますか?」というアンケートを実施した中、「興味があるが実施していない」、「わからない」と回答した学校は35%ありました。その中で浮かび上がった「カリキュラムの作成」「活動の継続性」「予算の確保」「地域との連携」等の課題を本プロジェクトでサポートできればと考えています。

● プロジェクトの流れ

プロジェクトの流れには4つのステップがあります。①「従業員による出張授業」では、「服のチカラ」「難民問題」「SDGs との関係性」の3つのテーマを、パワーポイントや映像を用いて伝えていきます。これまでの授業形態は出張授業、映像授業、オンライン授業の3種類でしたが、2023年からは Google Earth を用いた授業も導入します。②「校内・地域へのよびかけ」および③「告知・回収」は、児童生徒が自由にアイデアを出し合い計画・実行することで、チームワークや考え抜く力を養うことができます。④「寄贈・振り返り」では、難民キャンプ現地でお届けした様子をフォトレポートにして、参加校の皆さんにお送りし、振り返りに役立てていただくことができます。

● 児童生徒の変化

プロジェクト前後で、参加児童生徒に調査を実施したところ、「世界の問題は、私の生活にも影響する」と回答した割合は、活動前 34%→活動後 44%。「世界で起こっている問題について、私はその問題をみんなと一緒に解決できると思う」活動前 16%→活動後 29%と増加しました。このことから、SDGs への理解が深まるだけではなく、社会課題を自分事として捉え、前向きな意見を持つ生徒が増えていることが分かります。

● 最後に

2022年度は、全国から745校、約8万名の生徒の皆さんにご参加いただきました。このプロジェクトに参加することで、服という身近なものを通じて、自分たちにもできる社会貢献活動があることに気づくきっかけになればと思っています。



◆発表者:山口 由希子(株式会社 ファーストリテイリング サステナビリティ部ビジネス・社会課題解決連動チーム)

花王株式会社

乾燥性敏感肌のスキンケアメソッド

乾燥しやすいこの時期に、先生方ご自身や生徒さんが実践できるスキンケアメソッドについてお話しいただきました。

◆VTR 出演: 久保 久子(花王株式会社 化粧品事業本部キュレルグループ)

NPO 法人いのちの教室/協賛カシオ計算機株式会社

「いのちの授業」の取組

「いのちの授業」は、いじめ、不登校、自殺をなくしたいという思いから、カシオ計算機株式会社在籍中の2007年に社会貢献の一環として立ち上げました。会社の理解をいただきながら2016年末まで継続し、退職後の2016年12月に NPO 法人を立ち上げ、今に至っています。これまで延べ約700機関に対して授業や講演を行い、約8万人(2021年11月現在)の子供達と触れ合い、小・中・高等学校、大学、特別支援学校、養護学校など、さまざまな学校を訪問しました。

気づき(その3)
大人の想像を超える思いを持っている。
子どもだから、又、体験が少ないから、
命については知らないだろう、
何も考えていないだろう、
そども達には教え、理解させることが必要、という認識
が否定された瞬間。

授業の骨格は「事実を伝える」「本気で伝える」「変革を促す」からなります。

気づきをもってもらいながら、それで終わりではなく、学んだことや気づいたことを行動に移し、自己肯定感を醸成して もらうことに主体を置いています。小学校4年以上の基本的なプログラムは90分で、前半45分、後半45分に分けて進 めています。3年以下は60分でお願いしていますが、4年生を含め、学校側との協議で決定しています。

低学年の子供達に「命は何だと思いますか?」と問うと、「かけがいのないもの」「絆」「おとうさん、おかあさんからもらった、たった一つのもの」「勇気」「希望」「愛」「何の為に生きるかを考えること」・・大人でも気づかないような命への思いを語ってくれます。そこから、命は「知識として教えるものではない」「言葉のみで伝えるものでもない」「頭で理解させようとするものでもない」ということに気づきを得ました。この気づきから、授業に「多角的視点で命に触れる場」「心の中から引き出す場」「子供達が自ら考え、自ら気づき、発言する場」という3つの場を設けています。

そのため、前半では生きる意味・価値や命の大切さなどの話を伝えますが、捉え方は個々の心の在り方を尊重し、心の 中から大切な思いを引き出す授業としています。

授業後、全国約4万人の子供達から手紙が届きました。ある高校で約200人に授業を行った後、約40名の子供達から「命を絶とうと思っていた」という手紙が届きました。20%の子供達が命を絶ちたいと思っている学校があるということ、そして、これだけの命を助けるきっかけとなる授業であれば、使命感を持って続けていかなければならないと思っています。

今後も子供達の命を助けるきっかけを創出するために、また、様々な面で思い悩んでいる子供達に心の癒しを提供するため、そして、いじめや不登校をなくすために精一杯努力していきたいです。

◆VTR 出演: 若尾 久(NPO 法人いのちの教室 理事長)

ポスター発表(会場発表)

ユネスコスクールとしての ESD の取組内容を公募し、各学校に発表いただいた。

◆司会:住田 昌治(学校法人湘南学園学園長)



◆石田 まなみ(東京都杉並区立西田小学校教諭)

「NISHITA 未来の学校」

本校は今年度創立80周年、ユネスコスクールの認定から8年目を迎えました。学校目標である「Think Globally Act Locally 地球規模で考え足元から行動せよ」を実現する為、日々研究に励んでおります。本校の ESD は生活科、総合的な学習の時間を中心に行っており、子供たちが自分の探究したいテーマや課題の解決に向けて学びを深め、行動に繋げら



れるように学習を進めています。2019年度より学びの成果と地域課題の共有を通して、次年度の教育課程に向けた教育活動の重点項目の合意形成を目的として「NISHITA 未来の学校」を行っています。第3回目の「NISHITA 未来の学校」では、子供たちから「学期ごとに保護者・地域の方と意見を交流する機会が欲しい」「課題解決に向けて一緒に取り組んでくれる方が欲しい」という提案がなされました。それを受け本校では「子供と大人が話し合う時間を設定」し、「地域の方と協力しチーム ESD を結成すること」を実施しました。話し合いの時間では、自分の探究するテーマや課題を保護者や地域の方々に発信し、賞賛や感想、助言など沢山のアドバイスをいただきました。子供たちは大人たちと話し合うことで、自分の思考や可能性を広げることができ、自分の考えを相手に分かり易く伝えることの大切さ、課題解決の為に多面的に考えることの大切さを学ぶことができました。この時間への手立てとして、教員はあまり口を出さず見守る立場を取ることを意識し、子供たちが探究したいテーマや課題とじっくり向き合う時間を取ったことも重要なポイントです。今後は子供と大人の話し合いの時間を子供主体で実施・運営できるようにしていくこと、チームESD の更なる充実を図って行きたいと考えています。今後とも皆様のお力をお借りし、地域に開かれた学校運営ができるよう努めて参ります。

◆高田 克巳(千葉県八千代市立大和田南小学校教諭)

「ESD×特別支援教育」

地域3校の特別支援学級児童と本校の通常学級の児童が共に取り組んだ交流学習「ESD ×特別支援教育」3校合同クリスマス会をご紹介します。この取組は特別支援学級の子供たちが主体となって交流学習を作り上げ、平和や環境の大切さを学び地域に発信することで自分たちの持つ力や可能性を感じて欲しいという共に生きる力を大切にした試みです。取



組の3つのコンセプトは①環境教育②平和教育③コロナ対応を含む安心安全な教育です。①環境教育では調理実習で出た廃油を各校でキャンドルに再生し、その炎を囲んでキャンドルサービスを行う経験をしました。②平和教育ではハンデを持つ子供たちには特に目に見えにくい「願い」をキーワードに学習しました。③安心安全な教育では子供たちの学びを止めないという合言葉の元、市内の ICT 環境を活用し、密を避け楽しく当日まで児童の活動意欲を高めていくことができました。当日は各学級が学習し考えた平和や環境への願いを発表しました。そして体育館中央に置かれた 100 個以上の手作りキャンドルへの点火を行い、子供たちはしっかりと手を繋ぎ「世界が一つになるまで」を合唱しました。本校にとってこの取組は校長をリーダーとするホールスクールアプローチとなっています。八千代市の取組はESD×特別支援教育の可能性を広げる「誰一人取り残さない教育」です。ESD という大切であるけどハンデを持った

子供たちには抽象的で捉えにくい部分がある学びに、見える化や意欲化、生活へのフィードバック、スモールステップといった従来の特別支援教育のエッセンスを加えることで、より具体的で分かり易い学習ができるということです。そしてこのことが学校や地域を挙げて障がいの有無に関わらずどの子も主体的に取り組む ESD の学びに繋がっていきます。

◆佐藤 駿介(晃華学園中学校高等学校教諭)、瀧村 尚也(麗澤中学・高等学校教諭) 鈴木 啓介(公益財団法人五井平和財団)

「GOALs の取組 その内容と意義」

3校協働 SDGs チャレンジ「GOALs」の取組について発表致します。本年度はオーガニックコットンを取り上げ「福島から考える持続可能な未来」をテーマに行いました。各校から5名ずつ有志の生徒を募り15~16人のチームで月1回のミーティングを実施しました。実際に福島県いわき市のコットン農家で収穫体験をしたり、各校の文化祭や外部イベントでコットンを使ったオリジナル手ぬぐいなどの販売を行いました。学校を超えた学び



や体験は生徒にとって学校での自分をリセットできる、家と学校以外にも世界が広がっていると知ることができる非常に重要な体験だと思っています。GOALs の利点はプロジェクト型学習の業務をシェアできることです。プログラム作り、各所との調整、生徒の指導を先生一人でやる大変さが実感としてあります。それを複数の教員や財団の力を借りたことで、苦労は三分の一に喜びは三倍になるというすごく良い関係性が作れたのではないかと思っています。また他校や他団体のノウハウを学ぶことができるのも他校と協働するからこそのメリットだと思います。プロジェクト型学習の暗礁というのはまずやり方が分からない、通常業務に加えるには負担が大きい、モチベーションの維持が難しいというのがあると思います。3校合同で行えばやり方のシェアができ、お互いに協力し合うことにより負担を軽減することもできます。志を同じくする先生方と交流することによって自分のモチベーションを高く維持することもできると感じています。今回のプロジェクトで学んだことは、リアルに触れる度に生徒の自分事化が進むということ、先生も楽しむことが大事で、自分たちのモチベーションや興味は非常に重要だということです。本日のような場で出会って、同じような志を持つ先生方と一緒にできればと思っていますし、仕組みそのものをみなさんと共有して広げていきたいと思っています。

◆石田 治輝、渡邊 悠斗、大河原 春斗、藤田 千尋、髙橋 陸、日野杉 陵汰 (宮城県仙台第三高等学校 2 年)

「大堤沼インクルーシブ公園化計画案」

本校はスーパーサイエンスハイスクール SSH に認定されており、探究という科目があります。普通科の生徒全員が探究活動を行っており、SDGs をテーマとした社会問題の解決策についてゼロから考えて一つのテーマを探究します。私たちの班が考えている探



究活動「大堤沼インクルーシブ公園化計画案」をご紹介します。大堤沼は本校の南から西にかけて位置する沼で、上堤・中堤・下堤の三つの沼の総称及び公園のことを指します。しかし公園として立ち入れるのは小さな広場のみで、急な階段が多く利用しやすい公園とは言えません。周辺は幼稚園や学校・介護施設が多く、高齢者や子供の人口が増加して住宅街が広がっています。私たちは SDGs のII番「住み続けられるまちづくり」を目標に大堤の緑に囲まれた広い環境を利用し、周辺地域にとって需要の高い地域の方々の憩いの場としてインクルーシブ公園を作りたいと考えています。具体的には①手すりがある、段差が少ない遊具・健康器具広場を作る。②緑と水辺の様子を楽しめるウォーキング・ランニングコースを作る。③伐採した木を再利用したウッドチップ舗装の採用。ベンチ・東屋・外灯の設置。④森林の安定を取り戻し CO2 排出量を減らす為の伐採・除草。⑤景観を良くし、視覚障害のある方でも香りで公園を楽し

める為の花植え。⑥安全性や利用のしやすさを重視した駐車場・トイレの設置。⑦ベビーカーや車いすでも入れるスロープの設置です。この公園が自然とのふれあいの場、地域の繋がりの場、学びの場となることを目指し、SDGs を広げ、SDGs 達成への一歩にしたいと考えています。今後の展望として周辺地域へのアンケートの実施、区役所への相談・提案、コスト面の見直しを行い、この案をより現実的なものへ近づけていきたいと考えています。最終的にはこの公園が人々の SDGs への理解を広めるきっかけになって欲しいと考えています。

◆嶋田 吉朗(学校法人嶋田学園飯塚高等学校 学校企画部長)

「商店街連携協定に基づく教育活動と、ESD を支える地域社会ネットワーク」



ユネスコスクールとして取り組んだ活動の一つ「飯塚市中心商店街との連携」を報告します。本校発祥の地である飯塚市の商店街と連携協定を締結後、吹奏楽部のコンサート定例化や製菓部と商店街とのコラボケーキ作成展示など、小さな活動から取組を本格化させていきました。その後福岡大学商学部とのコラボ活動を通じて商店街で販売を行うイベントを成功させ、生徒たちは自己肯定感を高めていきました。こうした活動を

踏まえ、本年度は商店街全体で学園祭をやろうという構想に発展しました。背景として、商店街の広い空間を利用した密の問題の解消、衰退が進む商店街の大きなイベントを通じた活性化があり、商工会議所を加えた三社連携協定の元、開催に至りました。商店街の空き店舗や空きスペース、駐車場を活用して、生徒がクラスごとに出し物を出店しました。シルバー人材センターが運営するたこ焼き店とコラボしたたこせん屋や、ひよことのコラボであんパンを作って販売するなど極力商店街のお店とのコラボ出店を行いました。空き店舗は、生徒がきれいに掃除をしてゲームコーナーやお化け屋敷として活用しました。商店街で学園祭を行ったことは SDGs の観点からも様々な意味づけがあります。古紙ペーパーバッグの使用、古着回収、献血など SDGs の貢献も構想しながら、経済効果、大きなパートナーシップのネットワークを広げることができたと思います。SDGs の基本的な前提として、社会・環境・経済という三つの大きな要素の持続可能性は一体で切り離せないと思っています。それぞれの領域を超えた協力を可能にするような基盤となるネットワークを作るにあたり商店街は非常に最適な場所ではないかと思います。連携の基盤づくりとしていきなり大々的なものではなく、小さな活動を続けたことで可能になった部分が非常に大きいので、これから先は教員主体ではなく、いかに生徒に主導権を渡していけるかが課題だと思っています。

ポスター発表(オンライン発表)

- ◆司会:棚橋 乾(全国小中学校環境教育研究会顧問)
- ◆発表:岩本 宏幸(会津若松市立川南小学校教諭)
- 「問題発見・解決学習を通した ESD 実践の再構築」
 - ~STEAM の視点からの授業化を通した活動から探究への変革~



本校は幕末の戊辰戦争で活躍した彼岸獅子の伝承活動、緑の少年団を中核とした緑化活動、 障害者施設との交流活動が評価され2015年にユネスコスクールの仲間入りを果たしました。 しかし時が経ち、形だけが引き継がれ、学び方やそのねらいが曖昧となり、やらされる活動に 魅力を感じないという状況に陥りました。こうした状況を変革する為、今年度 ESD を学校研究

の根幹に据え、従来の活動を発展させながら子供の探究へ変革するよう新たに舵を切ったのです。そこで初めて手掛けたのは子供の学びを中心に据えた探究単元の構想でした。13段階設けた学びの節目に、心を動かす価値ある体験と、仲間と共に考え合う協働思考を連続させ、行ったり来たりしながら長期的な探究を支えていきます。その際、従来の活動を手掛かりに進化発展させていく方向で学びを充実させ、質を高めていくこと、単元の着地点では自分にもできる社会貢献を遂げさせることを目指しました。自分も地域の役に立った、誰かに喜んでもらえたという実感を導き、自己有用感や自己存在感を高めていきます。単元の構想においては、先生方が持続可能な開発のための学びとしてどのような取組を授業化すれば探究が充実するか悩みました。そこで新たに STEAM の教育視点を盛り込み、多様な窓口からアイデアを導きました。ESD に STEAM を掛け合わせることで各教科との橋渡しを図り、多様な学びの場を導くことを意図したのです。そして各学年が STEAM の視点から多様な探究対象や方法を導くことで充実した学びを実現できています。探究の着地点でねらう社会貢献も大きな広がりを得ました。子供たちは多様な体験を通して感謝の心が育ち、お世話になった方や地域の役に立てる自分になる、未来の作り手として育ちを遂げています。今後も ESD 実践を続けて参りたいと思っています。

◆発表:小林 ちひろ(板橋区立西台中学校 栄養士)

「いつでもどこでも SDGs ~食育編~」



本校は板橋区の研究奨励校として SDGs 教育の推進に取り組んできました。研究奨励校の 指定が終わった現在も継続発展させた取組を行っています。今回は食育と SDGs の関連に ついて①献立②地産地消③おたより④授業⑤委員会⑥部活動の六つを紹介します。①献立 では調理の段階で廃棄していたものを活用した SDGs メニューを給食に取り入れ、フードロ

ス削減に取り組んでいます。廃棄していたパンの耳を利用したラスクや出し殻を利用したエコふりかけがメニューの一例です。②地産地消として本校は板橋区内3名の生産者と契約し様々な野菜を給食に使用しています。生産者が責任を持って作った野菜を子供たちが責任を持って無駄なく食べる、生産者が野菜を作る際、農薬を極力減らす努力をしているなど様々なことを SDGs の視点から考えることができます。③食に関するおたよりでは地産地消を意識し、区内の野菜を使用した時は生産者の写真を掲載し、生徒にとって身近な存在となるよう心掛けています。おたよりには必ず SDGs のロゴを掲載し意識づけを行っています。④教科と連携を図った食育の授業では地域の生産者をゲストティーチャーとしてお招きすることも多く、生徒にとって身近な存在となっています。⑤給食委員会の活動では給食準備時間調査を行い、準備時間を早くすることで食べる時間を確保し残菜を減らしています。また食についてのポスター作成を行い SDGs のロゴを付けて掲示し、呼びかけをしています。⑥環境科学部の活動では地域の生産者を外部指導員と

して招き、校庭の花壇で野菜作りを行っています。収穫した野菜は給食で使用します。このように本校は地域の生産者の方と一緒に SDGs を推進しながら食育を行っています。今後も更なる工夫をして活動を継続させていきたいと思います。

◆発表:河田 雅幸(岐阜県立八百津高等学校教諭)

「アメリカザリガニから学ぶ SDGs」



本校の自然科学部で研究している「アメリカザリガニから学ぶ SDGs」について発表します。 ユネスコスクールとしての取組の中で、地域の環境について自然科学部の部員と一緒に考 えています。三年前に高台にある学校からほど近いため池でプラスチックらしきものを見つけ、 調査することにしました。アメリカザリガニは昨今問題になっており条件付特定外来生物にも

指定されていますが、このため池にはたくさんいます。調査の方法としてため池の水を調査すること、アメリカザリガニを捕獲・解剖し、胃や腸といった消化器官とエラからマイクロプラスチックを見つけることにしました。まずプランクトンネットに浮き輪を付け、ため池の表層の水を採取します。これはポリプロピレンやポリエチレンを集めようという意味で行いました。そしてこれを金属メッシュでろ過をします。この時に過酸化水素でタンパク質などを取り除きながらろ過をして、実体顕微鏡で観察をします。次にアメリカザリガニはネットを使って捕獲し解剖します。エラ、胃や腸などを分け、これも同じように過酸化水素で有機物を分解し、一週間放置してきれいになったものを実体顕微鏡で採取します。ここで問題となったのがプラスチックの種類の多さです。この辺りをうまく分析する為に JAMSTIC という研究所にお願いすることにしました。ため池の水、エラ、消化器官から見つかった小片の中から10片を JAMSTIC に送り分析してもらいました。その結果、水からはポリスチレン、消化器官からは PET が見つかりましたが、10片のうち3つしか見つからず、プラスチックの判別の難しさを生徒たちと感じました。ため池周辺の山には不法投棄が多く、様々な種類のプラスチックが見つかりました。難しい話も多く課題もたくさんありますが、今後もこの研究を部活動で続けていきたいと思います。

◆発表:酒井 徹(岩倉高等学校教諭)

「課外活動ベース 〜千羽鶴〜」



課外活動ベース「千羽鶴」について発表します。この活動は学校に固定された活動ではなく、 短期・長期のプロジェクトを生徒主体で行う任意の課外活動です。SDGs の概念の一つで もある誰一人取り残さないということを考えた時に、部活、学校行事に興味関心を示さなか った生徒や、退部などで活動拠点を失ってしまった生徒、なかなかやる気を見いだせない子

たちに校内のセカンドチャンスとしてこういった課外活動を提供しています。もちろん部活と両立して頑張りたいという子も一緒にやっております。プロジェクトの一つとしてケニアのお母さん支援をご紹介します。NPO 法人の協力を得まして、ケニアのスラムに住む脳性麻痺のお子さんを抱えたお母さんを支援するため、手を挙げた女子生徒3人がチームを組んで、日本の100円グッズの中から生活が便利になるようなものを提案して送り、現地の活動や生活に貢献したプロジェクトです。この中の1名の生徒は1年生の時に柔道部を退部しています。2年生の時に目標を見つける中でこういった活動に興味を持ち頑張ってくれました。部活などに参加していなくても力のある子たちが輝ける場というのがこのように作られていきます。また進路の面でも、この経験を活かして心理学を学びたいや、海外の大学に挑戦するきっかけにもなり、生活や勉強に対して目的意識を持てる活動になっていると思っています。この活動の特徴は地域・企業と実行できるプロジェクトであること、教員も手探りのため生徒と共に挑戦をしていくこと、任意かつ所属がないことによる安心感の中で失敗ができる環境であることです。課題は「持続可能」にするためのしくみ作りで、最終的には企画

自体を生徒が持ってくる形にしたいと思っています。社会とつながっている学校のもと、日本の高校生が経験を通して 勉強や生活に目的意識を持てる新しい育成環境のデザインという夢の実現に向けて今後も取り組んでいきたいと思 っています。

◆発表:米原 光章(福岡県公立古賀竟成館高等学校教諭)

「SDGs 万華鏡"KAGUYA"プロジェクト」~山と海の課題を同時に解決しよう~



SDGs 万華鏡"KAGUYA"プロジェクトの活動について発表します。本校が位置する福岡県古賀市は、海・町・里・山で構成され、本校は町の部分に位置します。地域の人材育成を目標に設置された学校で、地域貢献を課題に多くの地域事業に参加し、課題解決に取り組む活動をしています。今回のプログラムでは環境整備を行うだけでなく廃棄物から再支

援ができないかと考え、竹・海のごみを使って万華鏡を作成しました。また地域全体の活動にするため小学生と連携し、活動の第一弾、「SDGs 万華鏡オンライン交流学習」では、高校生が山側・海側の小学校にオンラインで海の問題、山の問題について説明を行い、地域の環境問題を自分事と捉え解決していく大切さを伝えました。第二弾「竹林整備プロジェクト」では実際に竹林で竹を切る作業を行い、放置竹林の現状を知ることで山への課題が一層深まりました。第三弾「海岸清掃プロジェクト」では万華鏡の材料となる海洋プラスチックの回収と清掃活動を行い、海洋ごみを身近な課題と再認識しました。第四弾「宗像国際環境会議」、第五弾「インド教職員招へいプログラム」では、SDGs 万華鏡"KAGUYA"プロジェクトの発表を行いました。生徒は環境問題について世界規模で取り組むことの必要性を深く感じました。第六弾「SDGs 万華鏡ワークショップ」では作成した万華鏡を小学生と共有しました。高校生と小学生の交流学習は社会性や豊かな人間性を育むと共に、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ機会となりました。第七弾では小学校と「SDGs 活動発表会」を予定しています。今回の活動を通して、地域の課題は世界とつながりあっていることを知り、環境保全の重要性を考えるきっかけになりました。今後は地元企業・行政と連携し万華鏡"KAGUYA"の商品化、万華鏡を通した高齢者や障がい者との交流、地域の空き店舗を活用した SDGs 発信の拠点地づくりにチャレンジしていきたいと考えております。

◆発表:中許 竜宏(湘南学園小学校教諭)

「世界を感じ、未来を創る!!」~子ども達のつぶやきから始まる学び~



本校では「自分を見つめ、振り返りながら、自分を築く土台(礎)を創ることができる」、「自分の生き方を考えることができる」という生活・総合の教科目標の元、体験を通して学ぶ、課題を見つけ解決するという二つにこだわって学びを作っております。体験を通した新たな発見、そこから得る喜びや生じる感動は何事にも代えられない計り知れないものがあります。

本年度はいろんな国をもっと知りたい、そしたらもっと分かり合えるかもしれないという子供のつぶやきから国・世界にターゲットを絞り実践を行いました。まずカオハガン島の崎山さんという方に来ていただき島民の方々との触れ合い、生き方、自給自足の生活の仕組み、本当の幸せについてお話しいただき、実際にカオハガン島とライブでつなぎながらお話をしていただきました。次に環境活動家でラッパーの神澤清さんが実際にウクライナに行き、ウクライナの今を歌にしたい、みんなに伝えたいということで Zoom でつなぎ、現地の先生にも入っていただき生の声を聞かせていただける機会を持ちました。子供達が心を動かし世界平和について考える時間となりました。更にそこから地球環境問題、特に海洋プラスチックや温暖化に対して世界の国はどんなことをしているのかという学びに繋がっていきました。我々湘南学園は「繋ぐ」ということを大切にしています。学び・地域・人・ESD・ユネスコスクールを柱に置き、「繋がり」を大切にしな

がら学びを作っています。日本や世界、地域の中で生きる地域の一員としていろいろな繋がりを感じながら学びを繋いていくこと、湘南地域での学びのハブ的存在に湘南学園がなるように、人が集まって学びが集まって教育が活性するような、持続可能な未来を創っていけたらと思っています。

研究協議会

(i) 平和·国際理解をめざす

◆司会:関田 一彦(創価大学教授)

◆発表:治部 浩三(大阪・関西ユネスコスクールネットワーク(ASPnet))

伊東 望(宮崎学園中学校·高等学校)

実践事例のIつめとして、宮崎学園中学校・高校の伊東望先生による活動報告がありました。宮崎学園高校は、今年度、宮崎県内の高校として初めてユネスコスクールに正式登録された学校です。様々な教科で SDGs を意識した学習活動を通じて生徒の問題意識や積極性を高めています。特に、普通科グローバルコースでは台湾高級中学校とのオンライン交流や宮崎国際大学との連携など、国際理解教育の充実に努めています。また、クラブ活動としてインターアクト部が取り組むマラウイ支援が紹介され、JICA 九州や都城ユネスコ協会、宮崎県文化連盟国際ボランティア部門など様々な地域リソースとの連携・協働を通じた実践の広がりは印象深いものでした。

次に、ネットワークによる学びの必要性と重要性について、大阪・関西 ASPnet 事務局長の治部浩三先生による報告がありました。いかにして生徒たちの心の中に平和の砦が築かれていくのか、具体的な学びの交流事例からその構造を明らかにしようとしました。大阪・関西 ASPnet は2003年度に大阪府内にある3つの高校がユネスコ協同学校に加盟したのを機に、学校に通うすべての児童生徒が対等に・平等に学びあうことができるネットワークを目指して連携したのが始まりです。その翌年からアジアの国々を中心とした学びの交流が始まり、現在まで19年間、活動は続いています。学びの交流では毎回準備セミナーが3~7回開かれ、ユネスコの理念、ESD、平和、身近な諸問題などの考え方や、ホスト・ゲストとしての態度振る舞いなどを、校種を越えて学び合っています。現在では、小中学校を含む20校以上の児童・生徒に加えて、ネットワークで育った生徒が大学生として、企業人として、さらには教員として自校の生徒を引率して参加するなど、その広がりが見られます。

どちらの事例も児童・生徒たちが我がこととして地球的課題に取り組む態度を確かに育成していることをセッション全体で共有することができました。



(ii)学び方を学びながら目指す知(協働·探究活動)

◆司会:伊井 直比呂(大阪公立大学教授)

◆発表:仲丸 和宏(福島県只見町教育委員会) 太田 我矩(埼玉県久喜市立久喜小学校)

実践事例のIつめとして、只見町教育委員会の仲丸和宏氏から活動報告がありました。只見町は、自然と人々の共生が認められユネスコエコパークに認定されています。一方で、過疎化・少子高齢化という大きな課題を抱えており、そのような中でこれからの教育が創り出されました。それは、学校の教育活動が町民全体で共有され、ふるさとのよさを再認識して地域への愛情と誇りをもちながら生涯にわたって心豊かに生きていけるような教育への転換でした。このため、只見町の小中学校全てがユネスコスクールに加盟して「否定教育」から「誇り教育」へ、そして児童生徒が「学ぶ」教育から「貢献する」教育へと転換が図られました。その具体化の一つとして、小学校で ESD/SDGs の課題解決学習をカリキュラムベースで学び、続いて中学校でプロジェクトベースの実践へと展開して自分なりの問いをもって持続可能性の課題を発見・解決していくことです。特徴的なことは、この取組が地域の力強い協力を得ながら実践されていること、そして、この影響は子供たちの自己有用感を高めるだけでなく、大人が ESD/SDGs ネイティブの子供から多くを学んで町全体が共感的に学びあう場となっていることです。

2つめに、埼玉県久喜市立久喜小学校の太田我矩先生から「デジタルシティズンシップ教育の推進」をテーマに発表いただきました。デジタルシティズンシップ教育とは、デジタル技術の利用を通じて社会に積極的に関与・参加する力を養う教育(欧州評議会)で、同校はそれを可能にするスキルとコミュニケーション力を培う教育を推進しています。特徴的なことは、一人一台の端末を駆使して学ぶ時代において、既存の基本的なスキルやリスク・モラル等をベースにした限定的な利用概念を超えたデジタルの利用を意図する点にあります。具体的に、個人と社会のWell-beingの実現のために積極的にデジタルの力を借りて人と人とがつながり、また世界の問題ともつながって予測困難な未来を乗り越えて行くことを目指したイノベーション力として捉えていることです。この教育はたちまち SDGs に結びつく問題解決

学習とも連携します。つまり、児童自らの学習や実践、考えや気持ち、疑問や問題意識が積極的に発信されることで異なった地域の人とのつながりを生み、身近な問題から世界の問題までの課題解決に多くの人の力を借りながらも、自分ごととしての「学びあい」(UNESCO)が可能となっています。



(iii)誰一人取り残さない学び(社会的課題の解決)

◆司会:市瀬 智紀(宮城教育大学教授)

◆発表:平澤 香織(神奈川県横浜市立東高等学校)、中島 光陽(横浜市立東高等学校2年) 佐野 文昭(兵庫県立川西明峰高等学校)

在57 人品(天库东亚川西切峰间夺手权)

本協議会では、横浜市立東高等学校の平澤香織先生から「互いの良さをひき出す ESD:誰一人取り残さない学 び」というタイトルで実践発表がありました。特徴的な活動である、課題探究活動(イーストタイム)と、2日間かけて全校を挙げて行われる Citizenship Camp を中心に実践発表がされました。また、生徒の中島光陽さんが、全校の活動である ESD 委員会とサステナブル研究部の活動について紹介を行いました。

続いて、兵庫県立川西明峰高等学校の佐野文昭先生が「マジで課題解決やで、先生〜学び合いによる生徒の変容〜誰一人取り残さない学び」と題して実践発表を行いました。「明峰の学び」という地域連携を主体とした課題解決型学習や、校内留学体験、プレゼンディスカッション・探究活動を中心とする生徒主体の特徴的な学びについて報告されました。

続いての協議の場では、①生徒の変容について、社会的な課題解決に生徒が取り組むことで、生徒個人の変容と社会の変革が結び付くこと。生徒が自分で考えて行動したくなるように教員は生徒と対話を重ねる必要があること。生徒が自分で考えて行動に移したときに勇気をあたえる(エンパワーメントする)のが教師の役割である。といった意見が提示されました。

次に、②教員のあり方として、ホールスクールで ESD を進めるには、自身のやっていることが ESD・SDGs の追究する 課題解決につながることを、教員間で対話を通して認識を共有するプロセスが必要であることや、教科の教育の中で も、教科を現実社会と関連付け、教科の知識・技能が課題解決につながることを教員が意識することが重要であると いった意見が提示されました。

③課題解決学習については、高校生が課題についてすべて解決できるわけではない。限界があることも認識しながら、課題解決を進めるべきであるとの意見や、課題解決において、生徒に過度に「主体性」を求めるのではなく、教員も十分に知識や技能を披露するべきであるといった生徒の意見が示されました。最後に、「家庭と学校しか知らない生徒に、地域や世界について知らせることで、自己認識や自己肯定感を高めるのが学校の役割ではないか」という発言がありました。



閉会式

◆挨拶:白井 俊(文部科学省国際統括官付国際戦略企画官)



本日は、各ユネスコスクールが実践されている ESD の取組を中心に御発表いただきました。パネルディスカッションや質疑応答においても充実した議論がなされたのではないかと思っております。是非今日の発表を踏まえて各現場での教育実践に活かしていただければ幸いです。今年度から新たにユネスコスクールの定期レビューが始まりました。昨年8月には、218校を対象とした令和 4 年度の定期レビュー研修会が実施さ

れております。この定期レビューをきっかけにして、ユネスコスクール加盟校の活動の質の担保と共に、ユネスコスクール間のネットワークの強化、ESD の推進について、文部科学省としても尽力をして参りたいと存じます。皆様方それぞれの、ESD を通じた持続可能な社会の創り手の育成の為の御尽力に改めて感謝申し上げると共に、本日の大会を契機としまして今後のユネスコスクールの活動と ESD の実践が更に広がることを期待申し上げます。

ESD 大賞表彰式

1.受賞校の発表

〈文部科学大臣賞〉東京家政学院 中学校·高等学校 〈ユネスコスクール最優秀賞〉東京都杉並区立西田小学校 〈小学校賞〉愛媛県宇和島市立岩松小学校 〈中学校賞〉愛媛県新居浜市立別子中学校 〈高等学校賞〉関西創価高等学校 〈ベスト・アクティビティ賞〉愛知県立愛知商業高等学校 〈審査員特別賞〉東京都八王子市立横山第一小学校 賢明女子学院中学校·高等学校



ベスト・アクティビティ賞は、学校や地域の特性を生かしたオリジナリティある活動、他の学校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校に贈られ、スタートアップ賞は、ユネスコスクールに登録して3年未満で優れた実践を行う学校に贈られる。※今年度スタートアップ賞は該当なし

副賞はカシオ計算機株式会社にご協力いただいた。

2.講評

◆細谷 美明(ESD 大賞審査委員長・NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム理事)



受賞校8校の取組の共通点として3点挙げます。1点目は、「体系的・系統的」な内容であること。今の児童・生徒さんが卒業してもこれからも続けられる活動、まさに「持続可能な活動」であり、単に学校教育の枠内でなく社会全体に広がりを見せる可能性がある活動でした。2点目は、活動を通し児童・生徒さんたちが地域のよさや課題を発見し、地域貢献につなげているということです。このことは、グローバル社会で必要な「自分を知る、自分のよさを知る」こ

とにつながります。まさに「社会に開かれた教育課程」であり「生きる力」を育てる教科等横断的な活動のお手本となるような内容でした。3点目は、どの学校も豊富な体験活動が行われており、机上の学習が実社会で役立てる学習に

なっているということです。SDGs の社会的周知もあり、企業や自治体等の積極的な活動と相まって彼らとの連携も体験活動に幅を持たせ、参加した児童・生徒に多角的・多面的な見方・考え方を定着させたのではないかと推察します。こうした学習は新たな発見が伴い次の学習意欲につながることが期待できます。今回の参加校の取組すべてが理念、カリキュラム、実践内容、活動の分析内容など、高校生だと感じさせる広い視野と深い学びにあふれていました。皆さんが考え実践した活動は、これからも多くの方の助言をいただきながらブラッシュアップし、地域の活性と発展に役立てさらに世界へ発信しましょう。期待しています

3. 受賞校代表挨拶

◆佐野 金吾(東京家政学院中学校·高等学校校長)



ESD 大賞として文部科学大臣賞をいただきありがとうございました。ESD の成果は生徒に表現されていると思います。生徒がどのように価値観や学びを変えたのかが ESD に結び付くのではないかと思います。今回改訂された学習指導要領は前文に持続可能な社会の作り手を育てるということが明記されています。その具体化の一つは主体的・対話的で深い学び、もう一つは社会に開かれた教育課程です。私はこれこそが ESD だと思います。千代田区の都心にある小さな

学校ですが、千代田区と連携を図る、地域の企業や地元の商店街、地域の方々の協力を得ながら生徒一人一人の学びを豊かにする、そういう取組が ESD の理念に繋がり、そして学習の成果が今回の受賞に繋がったのではないかと捉えております。ESD は全ての学校で取り組む課題です。今後も地域と共に学校全体で生徒一人一人が持続可能な社会の作り手となるよう進めていきたいと考えております。

4. 閉会挨拶

◆木曽 功 (NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長)

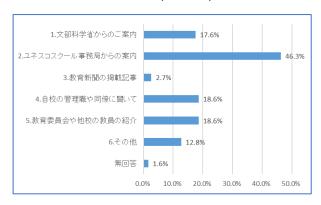


第1回のユネスコスクール大会が開かれたこの渋谷学園の場所で、14回目を開くことができて感無量です。その当時私は文科省におり、国際統括官の仕事をしていました。ユネスコスクールを日本に根付かせるための方策ということでいろいろ考えまして、ESDを強力に推し進めるための拠点となる学校を全国で500校作りたいということからスタート致しました。非常に多くの学校にご参加いただいて感謝しておりますし、当時考えていた以上の成果が出

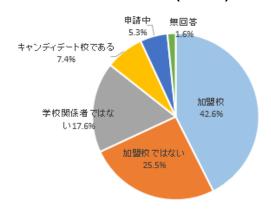
てきているのではないかと思っております。本日ご参加の先生方、決して方向は間違っておりません。非常に大きな変動する時代の中で、我々が進むべき道というのが SDGs であり ESD であろうと思っております。ぜひ一層 ESD、ユネスコスクールの実践活動に励んでいただきたいと祈念致します。

アンケート結果

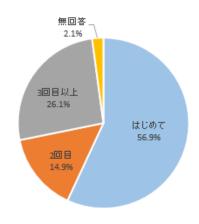
■本大会を知ったきっかけ(n=188)



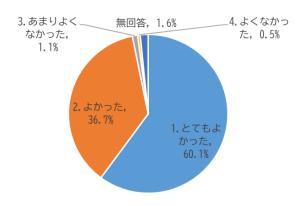
■ユネスコスクール加盟状況(n=188)



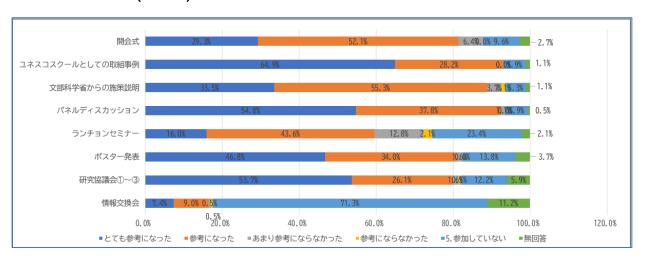
■本大会への参加回数(n=188)



■大会全体の評価(n=188)

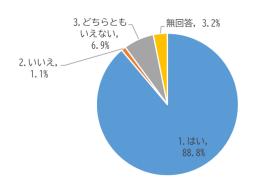


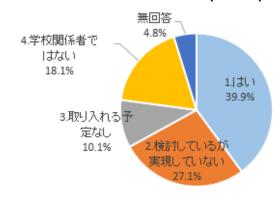
■各プログラムの評価(n=188)



■次回のユネスコスクール全国大会参加意向(n=188)

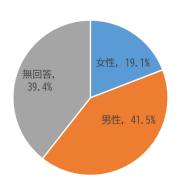
■企業と連携して取組をされていますか?(n=188)

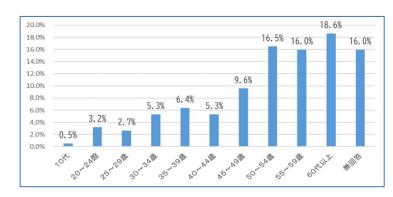




■性別 (n=188)

■回答者の年層 (n=188)





第 14 回ユネスコスクール全国大会 持続可能な開発のための教育 (ESD) 研究大会 報告書

発行日: 令和 5 年 2 月 14日 発行: NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム